
異世界で我が儘に

片翼の龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で我が儘に

【Nコード】

N8462U

【作者名】

片翼の龍

【あらすじ】

大学の帰りに交通事故に遭った主人公：桐谷龍司（22）
目覚めたら全裸で森の中に。人里を探していると魔物に襲われる少女を見つけ、知恵を絞って戦います。肉体ステータスは貧弱、ゴブリンレベルに勝てません！

神様が存在し、魔物に脅かされる世界。二度目の生を謳歌するために『世界の守り手』であるギルドに所属します。

主人公の行動は、作者だったらどうするかを反映させます。

RPG風最強を目指します。がいつになったら強くなれるのやら

⋮

異世界の森で（前書き）

作者の暇つぶしによって書かれた妄想小説です、ご注意ください。
作中に登場する人名、地名、その他固有名称はすべてフィクション
です。

初めて小説を書いた上、文才もないため、不快に感じた場合は速やかに退避してください。

異世界の森で

風の音がする。

正しくは風で揺れる木々が鳴らす音。

穏やかな陽光に照らされながら、全裸で森の中に寝転ぶ男。
それが俺。

「……なんぞなもし」

どこの方言かわからないが、口をついて出た第一声。

風を受けた時の肌寒さ、そして直射日光の暖かさ、そして背中いっぱいを感じるチクチクとした感触と土の柔らかさ。

わけがわからない。

誰か説明してほしい。

覚えているのは、サークルの帰りで自転車に乗っていたこと。

そして、真っ赤なスポーツカーが視界に入って。

……ああ、事故ったのか。深夜、信号が点滅する頃だったし車に注意するんだったなあ。

そうか死んだのか俺は。

自分に起きたことを確認し、考える。

確かな将来性を持たず毎日を生きて来た。夢もなく恋人もいない。

。死ぬのは怖いが何かやりたいこともなく、よくよく考えれば死は悲観するほどでもない。

なーんて無気力な自殺志願者みたいなことを考え、笑いがこみ上げてくる。

馬鹿馬鹿しい。

死んだら其処までじゃないか。

孝行したい両親がいる。

幸せになってほしい兄妹がいる。

TVゲームもやり足りないし、DTも捨ててない。

まだ俺は生き足りない。

だからだろうか。

こんな森の中に全裸待機するようなことになったのは。

今時の日本は誘拐なんて滅多にないし、ましてや俺なんかを攫って身ぐるみ剥いで放置することもないはずだ。

となるとここは日本ではあるまい。

……間違いなく俺は死んだのだろう。

もしかしたら病院のベッドの上で醒めない夢を見ているのかもしれないが。

こんな意味不明かつ理解不能な状況に陥れば、きっと誰しもが夢落ちを願うだろう。

だが、肌で感じるのは紛れもないリアル。

夢でもない、服もない、周りに人もいない（あ、これはむしろ助かる。裸だし）状況を理解したはいいがどうしたものか。

現実を理解した頃から徐々に背筋が寒くなってきた。

八方ふさがりでとてつもない不安に駆られたときのあの感覚だ。

おそらく全裸で自然を感じているこの解放感がなければ、すでにパニックを起こしている。

とりあえず、虫とか怖いので体の土を払ってから辺りを見回す。

……森だなあ。

完全に森だわ。

大学が山寄りにあって、森は身近にあったとはいえ、その中にまで押し入ったことなんぞない。

思い出すのは中学校の頃の沢登り。

そうだ。水場を探しに行こう。

水辺つてのは文明発祥の地、下流に沿っていけば民家があるはずだ。さすがにこんな場所に長居はしたくない。

ここが自分の常識が通じる場所なのか確かめる必要もある。裸のまま人に会うつてのは正直勘弁してもらいたいが、女の子以外なら遭遇しても対したダメージじゃあない。

……まあ不審者とされないことを祈ろう。

異世界の森で（後書き）

読んでいただきありがとうございます。感想、誤字脱字報告等頂ければ幸いです。

ファーストエンカウント（前書き）

歌詞は著作権に引っかけるとのこと。修正済み

ファーストエンカウト

クマよけに、歌いながら小川を探す。
一応斜面を下りながら歩いてるから、運が良ければ道路にぶつからないかな。

と、楽観的に考えつつ歩を進める。
いやー下りでよかった。

上りは体力的に無理だわ。

二曲分歌い終わったから10分ほど経ったのか、三曲目を考えているときにザーツという水音が聞こえてきた。

「おっとー、滝かな。運いいねえ」

この状況事態相当に運が悪いのだが、まあそれはおいといて。

「ヒヤツハー！ 水だー！」

木々を抜けた先には予想通りの滝。

そして根本はひと泳ぎできそうな澄んだ池になっている。

流れも続いてるみたいだし、第一目標達成だ。

とりあえず綺麗そうな水だし移動中についた泥でも落とすにしようとした時、それは聞こえた。

「な、なにをするつもりですか。変態！」

大声をあげなかった自分を褒めてやりたい。

別段肝が据わってるわけではない俺が醜態をさらさなかったのは、たまたま息を吐くのではなく思いっきり吸ったためだと明記しておく。

結構きつい負荷をくらった自分の肋骨にひびが入らなかったことを願いつつ、声がした方向に目を向ける。

「キケケッ！」

「いやっ、離してよ！この化け物っ！」

「ゲッホ！ゴホッ……あ、肋骨が」

おい不意打ちはやめろ、俺の肋骨がやばい。

水場を挟んだ向かい側。

緑色のちっちゃいおっさんが、少女を押し倒している。

ヤバい雰囲気濃厚に伝わってくる。

非日常の連続に気が重くなるが、自身の心の平穏のためにも彼女を助けないと！

普段の自分ならこんな状況、足が竦むか思考が停止してもおかしくない。

なんせ事なかれ主義の自分だ。

だが今は、考えずとも体が動く。

この非日常に毒されたのだろうか。

向こうまで距離は約15m。

周りをさっと見る。

使えるのは水場に転がる手頃な石ころ。

ゲーム風に言えば、「バレットストーン」か。

使用方法は投擲。

ダツと駆け出し、その勢いで石を拾う。

この位置なら少女はおっさんの影になり当たらない。

一瞬立ち止まって全力で投石する。

大きさは握りこぶしより小さい。

俺のひ弱な筋力じゃコントロール含めこれが限界だ。

狙うは後頭部。

背中でもいいから当たってくれ！

「でええい！！」

ヒュンと放物線を描きながら飛んでいく。

余計なことを考えずに投げた石は、見事な正確さでおっさんに当たる。

「ギャン！？」

頭をおさえて動きが止まるおっさん。少女を逃がすなら今しかない。

「早く逃げろ！早く！」

声を張り上げる。

少女は涙に濡れた顔でこちらを一瞬見た後、急いで逃げていく。きつとあっちに人の住む場所があるんだろうな。

そう考えつつ、第二投に備える。

緑のおっさんはまだダメージが響いているのかその場を動かない。

二投目を投げる。

当たらない。すぐに次の石を拾う。

三投目を投げる。

ケツに命中。大したダメージはなし。

「グアアッ」

おっさんが復活したようで立ち上がり、こちらを向………！？

逃走経路（前書き）

一話一話短いすね。

申し訳ないです。

文の長さや文法をいろいろ考えながらですので、いろいろ修正していく予定です。

逃走経路

「やっぱ人間じゃないよな……」

ブルドックのようにいかつい顔。口から覗く犬歯。高等な知性が感じられない赤い目。そして緑色の皮膚を考慮するに、ゴブリン、小鬼、オーク、オーガといった物語の中の化け物なのだろう。

今まで喧嘩したことなんてなかった俺に、狂人の相手すら出来ないのに、相手は狂った化物。

そんな奴がこちらを威嚇するように睨みつけている。
流れ出る嫌な汗を感じながら次の行動を考える。

（どうしよう、戦うなんて最後の手段だし走って逃げ切れる自信もない……）

大学に入ってからめつきり運動しなくなった今、持久力はなく、短距離走も100mを15秒はかかる。

対して相手は未知数。少女が抵抗していたことを思えば、筋力は体格通りか。

（つまりはスタミナ勝負つ……！）

奴の注意が完全にこちらに向いた今、逃げ出した少女はもう安全だろう。あとはいかに自分の身を守るか。

奴が落ちていた棍棒を拾い上げ、奇声を発しながら水場を迂回しながら向かってくる。直接距離はおよそ20mだったが、おかげで倍以上の時間を稼げる。

「これが、たった一つの冴えたやり方ってやつさ！」

対して俺は、助走をつけて滝壺の中に飛び込む。

思ったより深いが足はちゃんと底につく。水は澄んでいて冷たく、とても気持ちいい。

そのまま化け物のいる岸と距離を離していく。

ギアアギア騒いでる奴の方を見ると、棍棒を振り回しながらも追ってこない。

どうやら運はよかったみたいだ。

水に入ったのには理由がいくつかある。

一つは奴の武器が刃物ではなく鈍器だったこと。

地上なら効果を遺憾なく発揮するかもしれないが、水中では踏ん張りが効かず、水の抵抗で打撃は弱まる。

もう一つは身長差だ。俺の身長は178cm。対してあつちは140cmといったところか。

低身長のため、深いところでは取っ組み合いが不利なのだ。

戦えない、逃げ切れない俺に残された唯一の逃走経路が、この滝壺だったのだ。

逃走経路（後書き）

一話一話短いすね。

申し訳ないです。

文の長さや文法をいろいろ考えながらですので、いろいろ修正していく予定です。

小鬼との鬼ごっこ

いつまでも名前がないのは不便だし、あの緑色の化け物を『ゴブリン』と呼ぶことにする。

水に入ってから二分ほどしただろうか。

今ゴブリンと睨み合いの状況が続いている。

石をぶつけられ獲物まで逃がされたゴブリンはひどく立腹の様子だし、そう簡単には諦めてくれそうにない。

殺意を込められた視線なんぞ受けたことのない俺にとって、この状態は非常につらい。

ただ水中で立っているだけで、精神的に参りそうだ。

そのままさらに時間が経過する。

彼女は無事に人がいる所まで行けただろうか？

目の前のコイツを見てからは、この世界が決して安全とは思えない。まだ他に化け物がいるかもしれないと考えると不安に駆られる。

（まあ人の心配よりも自分の身を案じる方が大切だよな。即刻死に繋がるわけじゃないけど、はつきりいつて詰みだし）

水に入ったおかげで戦闘は避けられたが逃げ切れたわけではない。我慢比べでもあるが結局はギリ貧だ。

（となると、あの女の子が走っていった方に行くしかないよな）

現状で頼れるのは、やはり同じ人間しかない。

ゴブリンとはどう頑張っても友好的関係になぞなれないだろうし。

これからの行動予定を考える。

まずは少女が走り去った方向へ逃げる。

そして人間を探して助けを求めよう。

（箒でも物干し竿でもいいから、撃退できるだけの武器代わりになるものが見つかれば……）

あとは覚悟を決めて行動に移るだけ。

失敗したら命を賭けた殴り合いが始まり、その結果命を落とすかもしれない。

もしかしたら勝てる可能性もあるが、生死を賭けた戦いには卑怯もクソもなく、目つぶしや金的を繰り出す度胸が必要だ。

あいにくと自称ひ弱な俺には想像も出来ない。

投げる、突き飛ばすといった自衛手段をとるのが精一杯に違いない。
(捕まったときは、そのとき考えよう)

さあ始めよう。

これがホントの鬼ごっこってやつだ！

大きく息を吸い込み、そして潜水を始める。

水は澄んでいるため上から見ればどこにいるかわかるが、岸にいるゴブリンの身長だと水面が反射する角度になる。

水底のゴツゴツとした石や岩に手を伸ばし、深い場所を泳ぐ。

目的の岸まで10m弱。

一息で泳ぎきり岸へ上がる。

振り返ると、ゴブリンがこちらに気付き狂ったような奇声をあげながら駆けてくる。どうしようもなく恐怖を感じながら、こちらも追いつかれないように全力で走り出した。

「はっ、フツ、ハッ、ハッ……」

全速力の9割ほどで走るとゴブリンとの距離は少しずつ離れるようだ。

最もそんな速度は一分も維持できないため、今はつかず離れずだいたい20〜30mを維持するようにしている。

当然立ち止まれば数秒で追いつかれるだけに気を抜けない。

三分はそのまま走っただろうか。

今までの獣道のような細い道から、急に木立を抜けて開けた場所に
出た。

塗装されていない田舎の道路程度には整った道も続いている。

ここを行けば、街か町か村か、なにせよ人がいる場所につくはずだ。

振り返ると今まで追ってきたゴブリンは影も形もない。

（人のテリトリーが近くなつて諦めてくれたのかな）

そこそこ走り続けたおかげでかなり胸が苦しい。

最初すぐ逃げ出して、より深く森に入っていたら間違ひなく逃げ切れなかったろう。

周囲の森は静かで気持ち良い風が吹いている。

危機は去ったと思ひその場に腰を下ろす。少々疲れすぎた。

息を整えるのにも時間がかかりそうだし休憩を取ろうか、などと考えている最中。

森から先ほどのゴブリンが飛び出した。

「!？」

だらけていた脳は瞬時に覚醒し、逃走に移れと体に指示をだす。

（やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいつ!）

心臓は全力で血液を送り出し逃走を促す。

しかし、すでにトップスピードの追跡者と今から走り出す逃走者。

その場から駆け出して10mも進まないまま、背後からの衝撃で地面に打ちつけられる。

「ったあ!？くそつ痛え……」

「グギャギャギャ!」

タックルをかましたゴブリンはすかさず追いつき、俺の背中に飛び乗る。

その手に持つ不格好な棍棒も、今の俺には地獄の鉄槌に見える。

とつさに両腕を頭に回し守る。

頭をかち割られて死ぬのは想像もしたくない。

が、衝撃は予想外の場所にきた。

最初の一撃は臀部：ようは尻だ。

尻は衝撃に強いと思っていたがやはり痛い。

コイツ、石をぶつけられたお返しをしゃがった。

痛みに唸る俺を見て気をよくしたのか、先ほどよりもさらに大きな声をあげる。

この体勢はマズいと、両手を地につけ力を込め起き上がろうとした瞬間、知らない情報が叩きつけられた。

小鬼との鬼ごっこ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。
特に問題なければそのままです。

情けは人の為ならず

朦朧とする意識の中、無意識に右手で後頭部を触る。その手を見ると、指先が赤く染まっている。

（俺…は、殴られ…たのか…）

徐々に覚醒する意識と共に激しい痛みがやってきた。熱い痛い熱い痛い熱い痛い熱…初めの刺激に頭がいっぱいになる。

分かっているのは、ついに死が想像から一步現実に近いことだけ。

このままでは本当に死ぬ、反撃しなくてはとも、頭の痛みが邪魔をする。

視界は涙でぼやけ、握る拳にも力が入りきらない。だが。

「こんな…ことで…終われるか！」

ありったけの力で足掻き、裏拳がゴブリンにあたる。肉と肉が激しくぶつかり骨を通して振動が伝わる。

殴った俺も痛いんだ、あつちはずっと痛かろう。

ゴブリンが衝撃で横に転がったところを見て、俺は痛みにかけて意識を手放した。

side:ゴブリン

ツテテテ。

最後ニ一発デカイノモラッチマッタ。

セツカク美味ソウナ雌ヲアジワツテカラ喰オウトシテタノニ邪魔シ

ヤガツテ。

シカシオカシナ人間ダ。

裸ノママ戦イヲ挑ムヤツハ聞イタコトモナイゼ……マア美味クハナイガ食料ニカワリナイ。

頭ヲツブシテ持ち帰ルトシヨウ。

セーノ！

グシャ

side:???

「全く、あのハゲ！面倒な仕事ばかり押し付けるんだからもう！」

村を出て少し歩いたあと、通いなれた小道を通ってお気に入り場所に出る。

ここは精霊が休んでいてもおかしくなくらい綺麗な場所。

その証拠に栽培が難しい貴重な薬草も生えてるし、水も澄んでいて水浴びにもってこい。

薬師を営む両親の手伝いを始めたころ、おばあちゃんに教えてもらった秘密の場所。

おとうさんとおかあさんには内緒なんだって。

教えたら薬草全部もっていきそうだって笑ってた。

今はもう知ってるのはわたしだけ。

だからこの薬草が必要になったときは、おとうさんがとってこいて五月蠅いんだ。

いやになっちゃう。

今日も渋々薬草を取りに来ただけど、ここは落ち着くわ。

いい香りのする花に囲まれて自然を満喫する。
わたしが知る最高の贅沢。
せつかくだし少しお昼寝しましょう……QoO

なんだか嫌な匂いがして目が醒めた。
知らない匂いだ。

なんだろうと目をあけると世界が緑色に染まっていた。

「キケケッ！」

（ゴブリン！？なんでこの場所に魔物が）

ゴブリンが私に馬乗りになって、私の顔を覗き込んでいた。
私が目覚めたのを確認して、その手を伸ばし私の服を掴んだ。

「な、なにをするつもりですか？ 変態！」

ナニをされるかわからないが、嫌悪感が体中を駆け巡る。
手を振り払おうとするが、馬乗りのまま体重をかけられて上手くいかない。

「いやっ、離してよ！この化け物っ！」

絶望的な状況に目が熱くなる。
頼りになる両親も村を守る自警団もここにはいない。
私しか知らないのだ。
誰がが通ることもない。

おかあさんの顔を思い出す。

いつも優しく、薬師として村を守る立派な母。

おとうさんの顔を思い出す。

冒険者を引退してからも村を守り、母の手伝いをし、私に厳しくも愛情を持って世界について教えてくれていた父。

（神様。精霊様。私の願いをお聞き届けください。どうか助けて）

もう一度両親に会いたい。

ハゲだなんだと悪態をつくのはやめよう。

早く薬師として認められるように頑張ろう。

だから…お願い、助けて…

「ギャン！？」

「早く逃げろ！早く！」

男の人の声がして、拘束が緩んだことに気づく。

何が起きたのかわからないが、逃げろと言われたことを思い返し、ゴブリンを突き飛ばしてやっとその姿を確認する。

涙でよく見えなかったが黒髪で裸の男性が対岸に立っていた。

とりあえず今は逃げないと。

お礼を言うのも忘れて村の方へと駆け出す。

小道を抜け、村が視界に入ったところで息を切らせて走ってきた私を見た見張りの二人もこちらに気づく。

慌てて私に駆け寄り、

「どうしたアンナ！？何か合ったのか？」

心配して声を駆けてくれる。

全力で走ってきたせいで呼吸がづらい。

なんとか一言、「魔物が…」としか言えなかった。

顔を青くした二人だったが、すぐ自分たちの仕事を思い出し、

「おい見習い、クレアさんとこ行って旦那呼んでこい」

「り、了解しました」

一人が指示を出し、残った方が質問する。

「まずはこれ飲んで落ち着け。それで一体どうしたんだ。魔物を見たのか？」

腰に掛けた水筒を私に手渡して、私が息を整えるのを待ってくれる。

「ありがとう」と言って一口飲み、水筒を返す。

森でゴブリンに寝込みを襲われたこと、怪我はないことを彼に話したところ。

「アンナーー!!」

大声で私の名を呼び、凄い速さでこちらに向かってくるおとうさん。

「アンナ、無事か？怪我はないか？」

おかあさんの手伝いをするときのエプロンをつけたまま、私の方を揺すりながら聞いてくる。

いつもなら恥ずかしがってエプロンを人前でつけるなんてこと、絶

対にやらないおとうさんを見て嬉しくて涙が溢れる。
そして私を助けてくれた存在を思い出す。

「大丈夫だよおとうさん。魔物に襲われたけど、精霊様が助けてくれたんだよ」

「なに？精霊様を見たのか？」

「うん！真っ黒な髪でおとうさんくらい身長が高くって、裸だったけど格好良かった」

私が精霊を見たと言ったときは驚いたような顔をしたおとうさんだったけど、次の瞬間、急に厳しい顔になった。

「おい若造。武器を貸してもらえるか」

「構いませんが……」

おとうさんが見張りの人から槍を受けとる。

「お、おとうさん、一体どうしたの？」

おとうさんは村で一番強い。だけど、一人で魔物を退治しにいくのは危険だ。自警団のみんなが集まるまで待たないと。

「急がないと間に合わないかもしれん。」

「間に合わないって何が……」

「アンナ。精霊様に黒い髪をしたものはいない。可能性があるとし

たら、異国の血をひいた、同じ人間だ。」

サーッと、全身から血の気がひく。

武器も防具もなく魔物の注意を引いてくれた男性。

てつきり人ではない存在だと思っていた。

そして魔物に殺されることもないと。

そして気づく。

私の代わりに死ぬかもしれないことに。

「おとうさん！」

「道案内を頼めるか、アンナよ」

「うん！」

私を抱えて、おとうさんは走る。

足の遅い私は代わりに槍を持っている。

恐怖はない。

おとうさんの存在がとても心強い。

滝に通じる小道に近づいたとき、ゴブリンがああ男性を殴りつける
ところが見えた。

（まだ生きてる！）

ここまで逃げてきたのだろう。

しかし、まだ助けられない。

「おとうさん、急いで！」

私を下ろし、おとうさんは槍を受け取る。

さっきまでよりも速い速度で駆け出すおとうさん。

彼の方を見ると、ゴブリンが棍棒を振り下ろしたところだった。

ここからでもわかる酷い怪我だ。

叫び声をあげそうになったが、彼がゴブリンを殴りつけたのを見て、まだ死んでないことに安堵する。

しかしその後ピクリとも動かない。

ゴブリンが起き上がり彼にトドメを刺そうと再び棍棒を振りかぶる。まだおとうさんとゴブリンの距離は20m以上離れている。

間に合わない。

絶望が頭をよぎる。

その時、おとうさんの声が響く。

「『我に運命の祝福を与え給え：ブレス』」

魔法が発動し、おとうさんが一瞬光に包まれる。

そして手に持った槍をゴブリン目掛けて投げる。

祝福を受け、投擲された槍は真っ直ぐにゴブリンに向かっていく。

そして、棍棒が振り下ろされる直前に、グシャッと音を立ててゴブリンの頭蓋骨を貫通し絶命させる。

槍を受けた衝撃で、小柄なゴブリンは弾き飛ばされ、ゴロゴロと転がった。

おとうさんと私は、急いで男性に駆け寄る。

頭から血を流し、意識は戻っていない。

このままでは危険だ。

急いで手当てしないと。

傷を見て渋い顔をしているおとうさんを見る。
傷が深いことに気づいてる。
だから、お願いする。

「おとうさん、傷を治す魔法は使えない？」

「無理だ、俺には時間をおいて一度使うくらいしか魔力がない……あ
とは薬で治療するしか……」

「ここからじゃ家まで間に合わないよ。だから……ついてきて」

おとうさんに頼んで袖を裂いてもらい包帯代わりにする。
止血のため傷口を塞ぐが、すぐに赤く染まり始める。

おとうさんに彼を背負ってもらい、あの場所を目指す。
あそこに生える薬草ならきつと治せる。

待ってて、私を助けてくれた勇者さん。
今度は私が助けてみせるから……！

情けは人の為ならず（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

この話でプロローグ的なものは終わりです。

次話からの展開が定まり、ある程度書きたまったら投稿を続けます。

感想、ご意見お待ちしております。

面白そうだったら、改善したほうがよさそうならX文字だけの感想でも助かります。

夢の中で (前書き)

今回は設定のためにいれるので短いです。

夢の中で

一面の闇。停電したみたいに、光が消えた世界。ただそこに自分しかないような感覚。気づいたらここにいた。

（どうしてこんなところに？いつから？自分はどうなった？日常から非日常に足を踏み入れ、女の子を助けた後どうなった？殺されたのか？誰に？化け物に…？）

そこまで思考が巡った途端、周囲にいくつもの気配が現れる。否、埋め尽くされる。

ゴブリン、オーク、コボルド、オーガ、サキュバス、ヴァンパイア、ヘルハウンド、ケルベロス、ワイバーン、ドラゴン…植物のような物もあれば、岩石のようなものもある。自分が知るおとぎ話や伝説、伝承の中に出てくる悪役達。それらは闇の中にあっても、濃厚な死と闇を纏いながら、存在している。

そして、声が聞こえてくる。内容は理解できない。理解してはいけない。なぜならそれは、呪詛。世界のすべてを呪って余りあるほどの想いが込められた言葉。

頭が痛みだし、喉が乾き、胸は締め付けられ、腕は焼け、足は潰される。

そうか、ここは地獄なのだろう。どうやら二度目の死にはチャンスを与えられなかったようだ。このまま苦痛のうちに消えるのか。すべて終わるのか。もうどうでもいいことだ。だがひとつ、気になり出している。

なぜこの声はこんなにも泣きそうに

なぜこの声はこんなにも辛そうに

なぜこの声は助けを求めているのか

瞬間、闇の中に光が生まれる。自分の中に温かい力が声を伴って流れ込む。

ああ、『あなた』もそうなのか。なら…死にかけの俺だけど、お手伝いしよう。何ができるかわかりませんが、『女の子』を泣かせたままなんて嫌ですからね。

そして、光に抱かれたまま俺は意識を失った。

田舎に泊まろう(前書き)

誤字脱字がありましたらご報告を頂けると助かります。

田舎に泊まるう

「ふぁあつ……眠い……」

心地良い感触と柔らかな暖かさに包まれ目を覚ます。目覚まし時計代わりの携帯アラームがなかったな、と不思議に思い辺りに意識を向け、ここが自分の部屋ではないことに気づいた。

「え、なに……ここどこ？」

呟くようにでた独り言に答えるかのように、その部屋の入り口の戸が開く。入ってきたのは、長い金の髪に西洋風の穏やかな表情の女性、年はよくわからないが自分の母よりも若く見える美人だった。ゆったりとした白いロープを着ていると、まるで魔法使いのようだった。

「ふふつ、おはようございます。よく眠れましたか？一応、傷は完治したと思うんですけど」

こちらの様子を見た女性が話しかけてくる。流暢な日本語で話しかけられたことに戸惑う。いくらグローバルな時代とはいえ、まるで日本で育ったかのような発音。そして忘れてはならないのが、ここは自分の知らない土地であり、ゴブリンのような化け物がいる世界であること。

「あ、あの、えつと」

なんと答えるべきかわからず焦って出た意味をなさない言葉。命は助かったらしく体に痛みもない。痛くありません、とでも答えるか

？日本語でいいんだよな？

化け物のことを先に聞くべきか？

「えっと……あつ、この服どうしたんですか？」

見慣れない服を身に着けていたことに気づき聞いてしまう。すると、その女性はニコニコしながら答えてくれる。

「ああ、それは夫のよ。裸のままじゃ大変だろうから、治療が終わったあとに着替えさせたのよ？」

「は、裸……？」

言われて思い出す。自分はこの土地に何も持たずに来て、服も例外でなかった。少女を助けたときも、ゴブリンから逃げるときも、そして怪我を治してくれていた間もずっと裸だったのだ。急に恥ずかしくなつて赤面する。

「あら？その様子じゃわざと裸でいたわけじゃないみたいね」

と女性は愉快そうに言ったあと、真面目な顔になる。

「困っているなら何があつたか話してくれないかしら？」

急に尋ねられ、正直に話すべきか、それとも不審者扱いされない別の話をでっちあげるほうがよいのか悩む。受け入れてもらいやすいのは作り話だろう、化け物がいる世界だ。荒んだ世界なら山賊だつているに違いない。身ぐるみはがされて逃げ出したことにすれば解決だ。ただし、今後無知が問題になり嘘がばれる可能性も十分にある。

などと考えるいると、

「まあ、まずは食事にしようかしら。ちょうど二人が帰ってくる頃合いね」

そういつて部屋を出て行く。置いてけぼりにされ、現状把握に努めばーっとしていると、

「ついてらっしゃい」

と声がかけられたのでいそいそと部屋を出る。その際目につくのは、どれも非現代的な物の数々。金属製の物が見当たらないし、電気もなさそうだなと思いつながら先ほどの女性のあとを追いかける。廊下に出て、次はどこに行けばよいのか左右を見ていると、ちょうど左手奥の玄関らしき扉が開く。

「ただいま」おかあさん。あの人の様子はど…う…！？」

テレビでしか見たことのない、俗に言う金髪美少女が現れ、大きな声で帰宅を告げると共にこちらを見て固まる。たっぷり三秒経つてからダダっこちらに駆け寄る。

「あ、あの。お怪我は大丈夫ですか？」

「う、うん。怪我はなんともないよ。大丈夫、大丈夫」

見知らぬ女の子から話しかけられて動揺したが、なんとか返事に詰まらず答える。少女は安堵したように息をつき、家の奥側の扉に向かい開く。

「もつつおかあさん。目が覚めたら伝えに来てくれる約束でしょ」

「さつき起きたところよ。今からご飯にするから手伝ってちょうだいね」

「はい」

そんな会話が聞こえてくる。そういえばだいぶお腹が減っている。死んでからまだなにも食べていなかった。お呼ばれたし食事にはありつけそうだけど、先のことを考えると気が重い。財産のない状態は死活問題だな……

「あの、何かお手伝いすることはあります？」

大したことはできないが形式的に聞いておく。配膳なら任せろーバリバリ、ヤツテ。

「病み上がりなんだし座っていてくださいな」

はい、初アクションは失敗しました。おとなしく席につくことにします。

木製のテーブルにつき椅子に座る。

する事がないため、先ほどの続きを考える。非常に親切にしてくれる人に嘘はつきたくない。手をさしのべてくれる人は味方だ、とよく考えるのでできれば正直に話したい。よくよく考えれば不審者甚だしい自分を助けてくれたのだし、変なことを言っても受け入れてくれるのではないか。よし、まずは世間話から始めよう。なんで日本語が通じるかも聞きたいし。

考えをまとめている間に食事の準備が整ったらしく、いい匂いが広まる。少女がテキパキと配膳をし、三人でテーブルを囲む。

『いただきます』

「…いただきます」

並べられたサラダとスープ。二切れのパン。現代人にしたら物足りない食事だ。二人の様子を伺いつつ、味わって食べる。が、やはりというか味付けが薄い。コンソメもなければ、塩も少ないのか。昔は塩って貴重品だったもんなあ。

二人の食べる早さを見て調整しつつ、同じタイミングで食べ終える。

『ごちそうさまでした』

揃って発声。

「さて、それじゃあ自己紹介から始めるわね。」

突然、少女の母親がそう切り出した。

「私の名前はクレア。姓はアラベルよ。薬師を営んでいるわ。その子の母親よ」

「私はアンナ。家の手伝いで薬師を目指してるの。さっきは助けてくださってありがとうございます」

助けた？なんのことかと考えると、納得した。ゴブリンに襲われていた少女か。

「いえ、どういたしまして」

死にかけたけど、助けられたなら恩人だ。お互いに迷惑をかけても互いに助け合えたならいいだろう。優しい気持ちになっていると、次はあなたの番よ、と促してくる。

「俺は」

あ、名前どうしよう。そのままでもいいのか。カタカナっぽくする必要あるのだろうか。やばい、何も思いつかない。

「俺は桐谷龍司といいます」

ああ、やっちまった。どう思われるのか見当もつかねえ。と後悔している、

「やっぱり東方出身の方なのね」

とクレアさん。普通に受け入れられた。呆気に取られつい、

「え？日本あるんですか？」

「なにそれ？」

今度はアンナちゃん。え、日本じゃないのかよ。どんなひっかけだよ。

「残念だけど日本というのは聞いたことがないわ。私の知る東方の国の名はゲッコウ。さてさて、名前だけじゃなく他にもいろいろ話してもらえるわよね？」

早速墓穴を掘ったらしい。残された選択肢は一つになった。予定通りありのまま話すことにしよう。

「自分でもよくわかりませんが、俺はここから遠く離れた場所から来ました。ここでの常識や知識が通じないほど遠くです。なぜか言語は共通のようですが」

「ふむ、もしかして裸なのが当たり前だったりするのかい？」

「いやそれは違いますって。」

そんな野蛮人にはなりたくない。

「遠くってゲツコウのことじゃないの？」

「ゲツコウなんて国は知らないし、俺の国はニホンっていうんだ」

「ニホンなんて国はやっぱり聞いたことがないし、そうするとさらに海か山を越えた未開拓の方かしら？」

「きっとそれと違うと思います。理由がいくつかありますが、聞いてもらえますか？」

決定打になるであろう事実を述べるため前置きを置く。

「ええ、どうぞ」

「なにになに？」

「えっと、まずここにくる理由になったあの化け物のことなんです
が」

「ああ、魔物のことね。ゴブリンに襲われたって聞いたわ」

ああゴブリンって名称まで同じなんだ。

「うう…」

アンナちゃんは思い出したのか嫌そうな顔をした。

「……実は、俺が知る限りあんなやつは、魔物は、存在しませんでした」

「魔物がいない…?」

「それに生活の様子が異なります。金属製のものが見当たらない、簡潔に言えば……文化、特に技術分野に大きな差があります」

ここまで言えば、何を言わんとしているか大体伝わっただろう。

「それはつまり……」

「はい、俺は」

「伝説の古代人ね!」

「異世か…ええっ!？」

伝わらなかった。なんだよ古代人って。むしろ現代人だよ。

「えつとどういうことでしょう、その…古代人って」

クレアさんは目を輝かしている。ふと横を見るとアンナちゃんもだ。なんだよ古代人って。むしろ珍獣だよ。

「ええつとね、古いお話があるのよ。この世界の歴史にはね、遙か昔、神々といくつもの種族が共に暮らし平和を謳歌した時代があったとされてるのよ」

「街の神官様が時々お話してくれるよね」

え、神様いるのかよ。生き返った時点でファンタジーに足を踏み入れたとは思ったけど、どんどんスケールが大きくなるな……

「そうね。それで、その頃は魔物もいなくて、世界は今よりもっと繁栄してたの。きつと家も服も食べ物も医療も、いいえ、何もかもが優れていたはずよ」

だからあなたは古代人よ、じつちゃんの名に賭けて。残念違います、わたくし神様なんて見たことありませんし、宗教は人生における世渡り論だと思ってました。

「あー多分いや間違いなく違うと思います」

声小さく否定してみる。ガンとショックを受けて落ち込む二人。悪いけど真実はいつも一つなんだ。誤解を解くついでに伝説とやらの続きを聞いてみるか。

「それで、どうして魔物なんかができるようになったんですかね？神様がいなくなっちゃったとか？」

適当なことを言ってみると、クレアさんが復活し答えてくれる。

「いい質問ね。確かに平和な世界だったんだけど、ある事件が起き

たのよね」

「事件？」

「そ。一番偉い神様の双子の娘。ルナとアウラっていうんだけど、なぜか喧嘩が始まって、やがて大きな争いが始まるの。ルナが光を、アウラが闇をかたどって、他の神々も思い思いのほうに味方してね」

「なんとも壮大な姉妹喧嘩ですね……」

「ふふつ。それでね、闇の女神になったアウラは、世界に魔物を解き放つの。世界は荒れに荒れたわ。だけど、光の女神になったルナが、闇を封じ込めて魔物は数を減らした。ただ争い傷ついた神々は二つの陣営に別れてこの地を去った。今日は雲もないし夜になれば見えるかもしれないわね」

長かったおとぎ話（もしかしたら実際の話かもしれないけど）が終わり、気づいたらアンナちゃんがテーブルに突っ伏して眠っていた。

「あらあらこの子ったら。リュウジさん、悪いけど寝室まで運んでくれないかしら？お話はまた明日ね」

などと仰います。……俺が運んでいいのだろうか。クレアさんに尋ねると、

「あら、か弱い私に運ばせる気？」

強かな女性に印象修正したが、反論できないため、ごめんねと寝ているアンナちゃんに謝り体を持ち上げる。思ったよりも軽く、これなら余裕で運べそうだ。

「その子の部屋は二階に上がって一番手前よ。しつかりね」

やけにニコニコしている。俺みたいなイケメンでもない男に触られて、迷惑するだろうし、さっさと運んでしまおう。部屋について戸を開けようとしたとき、階下から、

「一人で寂しかったら一緒に寝ててもいいわよ」

何も聞こえなかったことにしよう。

アンナちゃんを部屋に寝かし下に降りると、ちょうど玄関の扉が開く。

「母ちゃん、今帰ったぞ」

筋肉質な男性が入ってくる。特徴といえば薄いことだが、個人の名誉のため言及はさける。先ほどの発言からしてクレアさんの旦那さんなのだろう。

「おお、お客人。元気そうじゃないか」

「ああえつと、お陰様で」

「いやー良かった良かった。娘の恩人を見殺しにしたとあれば、村中の笑い者、母ちゃんもブチ切れただろうからな。ガッハッハ」

見殺し……？見殺しというと危険なとき近くにいたってことだよな？
つまり……

「もしかしてゴブリンをどうにかしてくれたりします?」

「おう、危機一発ってやつだな。怪我の治療は母ちゃんとアンに任せたがよ」

おお、化け物を倒せる英雄のご帰還じゃ！

「そうだったんですか！ありがとうございます」

「なに、気にするな。娘の恩に報いただけさ」

いいなあ憧れちゃうなあ、強い男ってやつだな。

「あらおかえり。自警団の方は落ち着いたの?」

「おう、魔物に備えて見回りと警備は万全。武器の手入れも忘れずにやらせといたぜ」

「そう、ご苦労様。アンはもう寝ちゃってるから静かにね」

「むつ。てえと酒盛りは無理か。せっかく村長脅して一本頂いてきたのによ」

「明日になさい。そうそう、これが私の旦那よ。ほら挨拶しな」

「いけねえ、忘れてたな。俺はグラン」

夫婦の会話にすっかり気をとられていて反応に遅れた。

「……あ、俺は桐谷龍司といいます」

「そうか、リュウジ。何もないとこだがゆっくりしていけ」

そつだ、すっかり忘れていた。俺にはここに置いてもらう理由はないのだ。傷も治り服ももらった。いつまでもゆっくりしてはいられない。今後を考えないと。

「あの、でもそんなお世話になることは……」

心残りだが、すぐに出て行くのが礼儀だと思ったが、予想に反した言葉に引き留められる。

「ハッ何をいつてんだ。そんなの気にしないでいいんだよ。家主の俺がいつていえば問題ねえだろ？」

「でもアンナちゃんを助けた分はもう頂いてます、傷を治してもらって服も貸していただいて……」

「あら、遠慮しちゃってるのね。うーんそうねえ。こう考えてはどつかしら。あなたの傷を治したのは、娘を助けるためのもの。それ自体は等価かもしれないけど、まだ私たちはあなたに報いなければならぬものがあるの。アンナを助けてくれたその勇気に対して、ね」

と最後にウイングまでつけて言われて、気恥ずかしくなって何も言えない。

「そういうことだ。俺たちの気が済むまでゆっくりしていくしかないさそつだな」

グランさんも豪快に笑いながら同意してくれる。自分の勇気をほめられたことなんて今まであっただろうか。何もない自分が異世界で、初めて認められた気がして、嬉しくてちょっぴり恥ずかしくて、気づいたら目頭が熱くなっていた。

「あ、ありがとうございます」

止まらなくて泣き声になってしまったが、二人は「気にすんな」「泣いてスッキリしな」と声をかけてくれた。

こうして異世界初日の夜は更けていった。使わせてもらった部屋から見える月を眺めながら、今日一日を思い出し、気づいたら眠ってしまっていた。

田舎に泊まるう（後書き）

じわじわと強くなるか、下積みを延々とやるか、すぐに強くなるか…

まったく考えていないため、全てその場のノリです。どこでお話が破綻するか、もしくは想定外の流れになるか、乞うご期待！

田舎に泊まろう・裏（前書き）

激流（その時のノリ）に身を任せ、同化する…（適当に書く）

田舎に泊まるう・裏

side：アンナ

彼の応急治療が済んで、すぐに家まで運ぶ。家にはおかあさんがいる。治癒の腕前も設備もあるし、心配はない。

ただ気がかりなことがあって……

私が彼に助けられたとき、逃げるのに必死だったし彼は精霊様だと思っていた。私たちが彼を助けたとき、傷の手当てに集中していて他に気をやれなかった。でも今は落ち着いて彼を観察できる。そして、彼は同じ人間で、服を身に着けてないことを意識してしまった。

肌は綺麗で、傷はないし日に焼けてもいない。おとうさんとは何もかもが正反対に見える。髪もよく手入れされていて羨ましい。異国の人ってこれが普通なのかな……

後頭部の怪我だったからうつ伏せのままだったんだけど、手当てして村に運ぼうとしたときが問題だった。さすがに全裸だと…その…私が困っているのに気づいて、おとうさんが上着を脱いで彼の腰に巻きつけた。その際、

「アンナも気にする年頃になったか」

なんて寂しそうにいった気がする。

村についたら、おとうさんが見張りの人たちに少し話をしていた。どうやら自警団のみんなを集めて話し合いをするらしい。家の診療用のベッドに寝かせた後、

「後は任せた」

って、おかあさんと私に言って集会所に向かっていった。

おかあさんに事情を説明して、治療に参加させてもらう。薬草をすり潰し染み込ませた布を、打撲の痕があるところに巻いていく。頭部の傷には信仰呪文を唱えるみたい。対象を限定することで効果を高めることができるらしい。私が生まれる以前は、おとうさんと冒険者をしていたおかあさんは、魔法が使える。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒せ：キュアウーンズ』

薬草の効果と癒しの魔法で、もう完治に近い状態まで回復した。あとは経過を看るだけなんだけど、ちょうどおとうさんが帰ってきた。ゴブリンを見た私の話を聞きたいらしい。ほんとはずっと彼の看病をしていたいんだけど仕方ない。彼が目覚めたらすぐ知らせてね、とおかあさんをお願いして、おとうさんと出掛ける。自警団のみんなに話をして、一人で薬草を取りに行かないことを約束し家に戻る。おとうさんは、みんなのリーダーとして見回りの指示や村の防備の確認のため残るらしい。

家のドアを開けると、心配していた相手と目が合った。いつの間にか見慣れた服も着ている。ビックリしちゃったけど、すぐに状態を確認する。本当に大丈夫みたい。そのあとは、三人でご飯を食べ、初めて彼の名前を聞いた。私の知らない国の人らしい。名前の順番も逆で、私たちの流儀だとリュウジ・キリタニ。忘れないようにしなきゃね。

そうしていろんな話をしていると、おかあさんの悪い癖が始まった。

知識に自信があるからか、人に教え始めると止まらないの。小さい頃からよく聞かされた伝承だったから、だんだんと眠くなって……

気づいたら次の日の朝だった。そのあと、リュウジさんが私を部屋まで運んでくれたと知って、ちよっと嬉しかった。

田舎に泊まろう・裏（後書き）

主人公に服を着せたのは誰でしょうね。（まあアリバイがないのは一人だけだ）

誤字脱字など報告頂けると助かります。
昨日初感想頂きました。ご意見・ご感想・ご要望があれば是非送ってくださいね！

初めてのお使い（前書き）

だれにもうないしよでお・で・か・けなのよ

初めてのお使い

スツキリと目が覚めた。昨日は死にかけたというのに、以前よりもむしろ体調がよくなっている気がする。固いベッドから抜け出し、安いボロ靴を履く。服とついでにこれも頂いた。窓から外を見て、太陽の位置から大体8時くらいかなあとぼんやりと考える。この世界で時間を確認したり、お金を稼いだり、ようは生きていくための常識を得るにはどうしたらいいのだろう。普通に考えて、この一家にお世話になりながら、一般常識を教えてもらうのが最善だろうか。部屋でゴロゴロしているわけにもいかないし、今後の相談をしようと夫妻に会いに部屋を出る。部屋の向かいにはアンナちゃんの部屋があるが、もう起きて薬師として手伝いにいつてるだろう。階段を下り居間を抜け、作業場に向かう。薬の匂いが広がる中、薬品を調合しているクレアさんを見つける。

「おはようございます」

「あら、おやよう。よく眠れました？」

「はい、体調の方も、前より良くなったくらいで」

「それは良かったわ。今アンナと夫が薬の材料を取りに出掛けてるから手が放せないの」

「あ、いいんです。何か手伝うことがあるか聞きたいだけですから」

「あらそう？ん〜…えっと、薪割りってできる？」

「…経験がないので判断しかねます」

「慣れないうちは危ないから、薪割りはだめね。じゃあ水汲みに行ってもらおうかしら」

「水汲みというと、井戸ですか？」

「ここは近くに澄んだ小川が流れてるからそちらに行ってもらうね。場所は村の正面から見えるくらいだし大丈夫でしょう」

つまり以前見つけた滝から続いているのかな。あれは確かに冷たくて澄んだ水だった。

「わかりました！さっそく行ってきます」

「家の裏手に水瓶と運搬用の小さな桶があるから」

「ラジャー！」

初めてのお使い（異世界版）に気合いが入った俺は、勢いよく駆け出した。クレアさんが驚いた顔をしているのにも気付かずに。

「桶と聞いて、風呂のやつを思い浮かべても悪くないよな……」

予想より大きな水瓶と予想より遥かに大きな桶が、俺の目の前に存在している。まあ仕方ないか、多少きつくてもお仕事なんだし。まだ軽い桶をもって村の正門を目指す。木製の家が建ち並ぶ穏やかな村だ。時折小さな子供たちが遊んでいたり、農作業に精をだす大人

を見かける。正門らしき場所を見つけ近寄ると、二人の武装した男性が目に入る。簡単な防具と手には槍を持っている。防具は皮製なのか、ゲームでしか連想できないが。

向こうもこちらに気付き、まずは挨拶をしようと口を開いた瞬間、

「おお昨日の不審者じゃないか」

「ええっ!？」

いきなりの不審者扱いに度肝を抜かれる。どうしたことがとわたわたしている、

「先輩だめですよ。あんまりからかつちゃ。俺は構いませんが、旦那にぶっ飛ばされますよ」

「冗談に決まってるじゃねえか……。俺は軽く緊張をほぐしてやろうとだな」

「はいはい」

どうやら軽いジョークらしい。村を追い出されるフラグかと思って焦ったぜ……

「えっと、初めまして。君のことは聞いてるよ、アンナちゃんを助けたんだって」

「もしくは裸で行き倒れていた病人ってな」

ああ、確かに裸で頭に怪我して運ばれてたなら、不審者に見えるわ。

今の境遇が非常に恵まれていることに改めて感謝しよう。

「まあ旦那のところに世話になるらしいし、自己紹介しとくか。俺はサント、この村の自警団の一員で家は、ほらすぐそこだ。んでこいつがトラン。はい自己紹介おわり」

「……って俺にはさせてもらえないんですか!？」

「名前だけ分かればいいだろう別に」

仲のよいコンビなのだろうか。息があったいい漫才師になりそうだなあ。

「はは、ええと俺は桐谷龍司です。リュウジが名前なのでそちらで呼んでください」

「へえ、髪の色が真っ黒だから珍しいと思ったが、姓名逆と。東方出身の方だったか」

「ええ、訳あつてこちらにいますが」

「そうか。深くは聞かねえ。あんた悪いやつには見えないしな。水汲みなら、ほら向こうに見えるだろう。ここで見てやるから安心していつてこい」

「はい、ありがとうございます。魔物に襲われたら助けて下さいね」
笑いながら任せると言ってくれるサントさん。さっそく水を汲んでこよう。

「ではまたあとで」

「おう」

別れを告げ、桶を持ち直す。川まで50mくらいか。一分もかからず水辺に到着し桶を川に浸す。一度水を大量に入れたら持ち上げるのにも苦勞したため、半分程度で様子を見る。これでだいたい20kgくらいか。

「お、重いけどまだ平気かな」

とりあえず距離は近いのだから足りない分は往復するでしょう。ヨイショヨイショと門に戻る。頑張れよ、と笑いながら励ましをもらいそのまま家まで向かう。大きいほうの水瓶に中身を注ぎ込み、一息つく。そういえばどれくらい必要か聞くのを忘れていたな。ちょっと聞いてくるか。

「すいませ〜ん、クレアさん。今大丈夫ですか？」

家の中に声をかける。少しして返事があつたので家に入る。

「ちょうどキリがいいから休憩にしたわ。水汲みはどうだった？」

「問題ありませんでした。門の見張りをしてる方もいい人達でしたし」

「そう良かったわ。じゃあ昨日のお話の続きをしましょう」

「え、あの、まだ水汲みが」

「いいのいいの。急ぎじゃないから。一回分あれば昼食の用意は大丈夫よ」

強引に引き留められてしまった。またありがたいOHANASHIが始まるのか……

「それで昨日の続きというのは？」

クレアさんはすでに気合い十分でスタンバっている。

「昨日は神々が消えた話までしたわね？」

「はい」

「そして向かったさきが空に見える双子月なのよ」

なるほど、だから夜に見えると言っていたのか。しかし、

「月が二つあるんですね……」

新たな常識にカルチャーショックを受ける。しかも月にはウサギではなく神様が住んでいるのか……

「そうよ。で、これからが本題なんだけど、神々が地上から去ったときに他にも失われたものがあるの」

失われたものか。なんだろう。

「それって何なんですか？」

「『言語』よ。それもただの言語じゃなく神々が使っていた言葉。その失われた言語は光の女神ルナを表す月語と呼ばれているわ」

なるほど、ゲームでよくいう古代　語ってやつか。じゃあ今話してる日本語はなんなんだろう？聞いてみるか。

「それじゃ、今使われている言葉は？」

クレアさんは質問を受け、さらに目が輝く。ああ黙って聞いてたほうが良かったかな。でも一般常識を知るいい機会なのか。

「ふふふ。そう、今話している言語はその時代、神々と縁の薄かったとされる東方の国、ゲッコウを発祥とする言葉なの。月語が人々の記憶から薄れ、代わりに必要とされたために世界中に広まったり、今では共通語になったわ。そして、月語と共通語の間にも一つ。月語を辛うじて記憶に留めた人達によって作られたのがルーン語。私たちの名前を表したり、魔法を使うために利用されたりするわ」

なるほどなあ、日本語かと思っただけどやはり似て非なる言語なのか。ゲッコウってところは日本みたいな文化なのかもしれないな。そうかそうか。月語とルーン語と共通語か……名前を表すというと、アンナ、クレア、グラン、サント、トラン……カタカナってことなのか。ルーン語もわかりやすくていいや、魔法にも使えるしなあ。

……魔法だと！？

「クレアさん！」

「ひゃいー！」

勢い余って身を乗り出す。驚かせてしまったようだ。

「魔法が使えるって本当に!？」

「え、ええ使えるわ。というかそのことについて話すつもりだったのよ」

「ん?どんな話なんです?」

「リュウジくん、出掛ける時に『ラジャ』なんていったじゃない」

「確かに言ったような……」

「あれ、共通語じゃなくてルーン語よ」

「へ?」

どういうことだ。共通語があって神様言語の月語があって、その間にルーン語があるんだよな。この場合変換すると

共通語・日本語（平仮名・漢字）、ルーン語・カタカナ、つまりその先は

英語・月語

なるほど、この世界は英語が落ちぶれて日本語の時代が来たのか。元の世界と似た言語が主力なのは嬉しいが、世界中で日本語が通じるってのが日本人として一番嬉しいな。

「あのクレアさん、ルーン語と月語って大きな違いがあるんじゃないかな？」

英語をカタカナで読めるようにしたただけならあまり変わらない気がするのだが。

「大きな違いどころか全くの別物よー！ルーン語が魔法に使われるのは話したわね？魔法についても知らないみたいだから教えてあげるけど、神々がいたころの魔法は今よりも遥かに優れていて、その理由が月語による魔法発動率なのよ」

そろそろ置いてけぼり感がしてきた。魔法があるよーと言われても使い方もわからなければ仕組みもわからない。

「すいません…魔法について全くわからないのもっと簡単なところからお願いします……」

「コホン。…魔法とは生命がもつ魔力を媒介に世界へと意志を伝え、思いのまま世界を改変する技術、をいうわ。簡単にいえば魔力を使って望んだ効力を得るということね」

「先生、魔法が使えるれば何でもできるんですか？」

「（先生…いい響きね）本質はそうなんだけど、そのためには方法に問題があります。それが先ほどの魔法発動率です。私たちの意志を世界に伝える際、ちゃんと伝わらないことには魔法は使えません。最も認識されやすいのが月語、ついでルーン語、最後に共通語ですが、月語とルーン語には大きな差があり、また共通語も発動補助程度の効力しか得られません」

「つまりルーン語で魔法を発動させるけど共通語はおまけなのかな？」

「そう考えるのが普通だけど、共通語には他の使い方があるのよ」

「他の使い方？」

「言語は世界に対しての魔法発動率に関わるけど、共通語はさらに伝える意志をより明確にするために使われるの。あなたの怪我を治したときもそうだったのよ」

傷がすっかりなくなってたのは魔法のおかげだったのか……

「その魔法というのが『クレアさん、急患だ〜！』……ちよ〜どいいわね。実際に見せてあげましょう」

玄関に大声をあげた人と、その人に支えられながら苦しそうにしている男性がいる。

「いったいどうしたの!？」

クレアさんが駆け寄る。

「村の外壁の補強をしてたんだが、老朽化してたのか、材木ごと崩れてきやがって、脚を挟まれたんだ」

そういつて怪我をしている男性のズボンの裾を捲ると、赤黒く変色した肌が見えた。

「ひどい内出血ね。骨も折れてるかもしれない」

「ぐうつ…いつ…てえ」

うめき声をあげる男性。

「リュウジくん、あなたは知らないかもしれないけど魔法というのは私たちの生活にとつてとても重要なものの……。ひどい傷には薬師の腕をもつてしても対応できないこともあるわ。そして、魔力は無限ではないの。いまから使うからよく見てるのよ」

クレアさんが男性の足に向かって手をかざす。そして力ある言葉が紡がれるのを目撃する。

『我が手をかざす、彼の人の傷を癒し給え：キュアウーンス』

呪文とともにクレアさんの手が淡く発光し、男性の怪我に変化が表れる。まず赤黒い皮膚がみるみる健康な状態へ戻っていく。それと共に呼吸も落ち着き、怪我が確かに治っているのだとわかる。

「これでいいかしら。もう痛みはない？」

「はい、大丈夫です。どうもありがとうございました、クレアさん」

「お代は自警団の経費に上乘せしておくわね」

礼を言つて帰っていく二人を見送つて、クレアさんがこちらに向き直る。

「どうだったかしら？初めてみたんでしょ魔法」

「ええ、凄かったです。正直気持ち悪いくらいです……」

映像の逆再生をみて凄いなーと思うことはあるが、それが現実に体感できるところで行われると得体のしれない恐怖感もある。

「なるほど、面白い感想ね。今見せたのが信仰呪文よ。傷を癒す目的を持った呪文がキュアウーンズなんだけど、効果範囲を限定することで必要魔力をコントロールすることができるわ」

「今のは手が光っていましたが、共通語の『我が手をかざす』つてのが意志に反映されたんですか？」

「その通り。個体全部に作用するのが普通なんだけど、あなたのとくや今回みたいに、一部分がひどい怪我を負ったときはこうやって魔力の節約してるの」

「そうだったんですか」

魔法だけで全部治してるわけじゃないのか。それで薬師の技術も必要なんだなあ。だけど、今でまた聞きたいことができたな。

「えっと、また知らない言葉がでてきたんですけど、信仰呪文ってなんですか？魔法を使う呪文を信仰呪文っていうんでしょうか？」

「半分正解、半分外れね。信仰呪文のほかに、魔術呪文があるのよ。その違いについても知りたい？」

知りたいかと聞かれて、考える。無用の知識なら別に聞かずとも問題ない。しかし、重要な点がひとつある。

「俺も魔法が使えるんでしょうか？だとしたら知っておきたいです」
クレアさんはこちらをじっとみて答える。

「魔力がある人なら誰でも魔法を使うことは可能よ。そして人に限らず全ての生命は魔力を持って生まれてくる。だけど、リユウジくんは魔法を知らなかった。つまり魔法を使えない、使う文化ではないところから来たのよね？」

そのとおりだ。俺はこの世界で生を受けていない。生まれは地球で、そこには魔法なんてなかった。いや、確かに怪しげな儀式とか伝承とかはあったけど一般社会にはありえなかった。そして、意志を世界に伝えるなんて考えはどこにも存在しなかった。……おそらく、世界の仕組み自体が違うのだろう。そう考えると、俺は魔力を持っていない。魔法は使えない。

「昨日、神様のお話を聞いたときうやむやになっちゃったけど、たぶん俺はこの世界とは別のところから来ました。ちゃんと言つときますけど古代人じゃないですからね」

だから残念そうな顔をしないでください。このカミングアウトだって結構重要なことなんですから。

「俺の世界は魔法とは無縁とまでは言わないけど、あくまで空想の産物で、実際にはありえないものでした。だから、その世界で生まれた俺には魔力なんてないと思います」

「そうね、そう考えるのが妥当かもしれないわ。だけど、可能性に賭けてみるのも悪くないはずよ」

「なにか方法があるんでしょうか？」

「まあ試してみるのが早いわね」

「それはまたなんとも」

しかし、これで魔法が使えるようならこの世界でやっていく足掛かりになるかもしれない。いや、なってもらわないと困る。そう思った矢先、

「だけど、今のあなたには魔法を教えることができないの。正確には権利を持っていないといったところね」

いきなり問題が発覚した。

「えー、それはどういう……」

クレアさんは困った表情を浮かべ、こう続ける。

「一番の理由は人材確保、ついで安全保障といったところかしら。ようは魔法を使える者を必要とする組織があるのよ」

「その組織って一体……？」

そして俺は、これからこの世界の争いに足を踏み入れる、最初の入り口の名前を知ることになる。

「『神に守られぬ残酷な世界の守り手（God・Unassisted・Ill・Land・Defender）』、通称ギルドよ」

初めてのお使い（後書き）

おい、設定長えぞ、どうしよう。

思ったよりギルドが中二病臭くなつたが気にしないでください。 5
分ほどで当て字したやつなんで……

しかしいつまで奥さんとイチヤイチャしてればいいんだろうか。

あ、ご感想・ご意見待ってます。一文ずつ区切ったほうが読みやすいとか行間とか、どうすればいいかわからず統一してないんですよ……。いずれ大幅な修正が入るはずですので気長にお待ちください。

ではここまで読んでくださりありがとうございました。

クレア先生の一般講座（仮）（前書き）

世界設定の話が続きます。細かい名称は未定ゆえ、読む上で適当に覚えてもらえれば十分です。たぶん私もつろおぼえ設定になります。

クレア先生の一般講座（仮）

「ギルド……」

ギルド、中世において商人達が自分達の利益を確保するために発足した団体を指すんだっただけかな。

「ギルドとはその目的から冒険者ギルドとも呼ばれ、その下部組織として戦士ギルド、盗賊ギルド、そして問題の魔術ギルドがあるわ。そして目的は、神の直接的な加護が届かない世界で、魔物から生命を守ること」

そうか、この世界では利益を確保する以前に自分達の命を守ることが重要なんだ……

「リュウジくんが魔法を使うためには、魔術ギルドに加わり、承認されることが必要になるわ」

「わざわざそうしないとだめなんですか？」

「まあ、はぐれ魔法使いなんてのもいるけど、登録をする理由が魔物との戦いに備えるためというのが大きいわ。急な要請があったときに一人でも多く力がある人が必要なのよ。そのためギルド側は情報を管理しておく一環として、特殊な技能に優れた人材を発掘する意味も兼ねて、魔法を志す人には登録を義務付けているの。」

「そうだったんですか……」

「まあギルドの一員になれば、生活していく上である程度融通が利

くようになるし、組織の目的も理にかなったものだから登録すること自体は悪くないわ。私と夫もギルドに登録しているし……」

そついつて懐から免許証サイズの金属のプレートを取り出して見せてくれる。

「ほら、これがギルドに登録した者に与えられる証明書、ギルドカードと呼ばれているわ。これは自身の身分を証明することもできるし、ギルド関連の組織を利用する際にも役立つわ」

「じゃあ、クレアさんもグランさんも依頼を受けて魔物を倒してるんですか？」

「私たちも昔は冒険者として戦っていたわ。夫が戦士、私は魔法使いとしてコンビを組んでね。アンナが生まれてからは、母の跡を継いでこの村で薬師を始めたの。今じゃもうこの村の一員だから、冒険者に戻ることはないわね」

クレアさんはこの村出身で、冒険者の頃、夫であるグランさんと知り合い、寿退社みたいな形で故郷に戻ってきたらしい。冒険者としてはばちばちの実力で、この村の守護という理由で、ギルドから招集がかかったりはしないそう。つまり、力を示して有名になればなるほど、人々の期待と共に義務と責任がついてまわるのだろう。

「ギルドについては分かったかしら？あとはあなたの意思に任せるわ」

ギルドに登録すれば、戦いの技術を学び、命をかけた戦いに加わることになるだろう。もしくは、どこかの村に所属し商いを始めるか、誰かに雇ってもらうのが生きていく糧を得る手段になるはずだ。ギ

ルドに加入し、魔物を倒して富と名声を得るのは憧れるがリスクとリターンを考えないと。絶対条件は自分の命を守ること。逆にいえば、そのための自衛手段を確保することも必要になってくる。そして、手っ取り早く生き残る手段を得るにはギルドで魔法や戦闘の基礎を学び、死なない程度に鍛えてもらうことだ。魔法については、魔力がそもそもどうなっているのか分からないが、体力面で普通より劣っているのは漠然と分かる。なんせ生きていた世界の事情が異なるのだ。わかりやすくいえば、子供の頃から筋トレをするのが当たり前の人達の中に飛び込んだようなものだし。

いつまでもこの一家のお世話になるわけにもいかないし、何か自分に合った働き口が見つからない限りはギルドに登録することを目指そう。そう決心して、では肝心のギルドはどこにあるのか、という疑問がわく。

「クレアさん、俺、とりあえずギルドに登録するだけしてみます。魔法にも興味があるし、自分に何ができるかもわからないから。それで、ギルドに登録するにはどこに行けばいいんでしょうか？」

俺がギルドに参加する意思を聞いたクレアさんも、それが今の最善だと思っていたのか安堵の表情を浮かべる。

「ギルドは大きな街や村に行けば、だいたいは支部が設けられているわ。あいにくこの村にはないけどね。最寄りのギルドなら村を出て、街道から東にあるパールワットという隣町に行けばいいわ」

そういえば地理については東の果てに日本ぽい国があることしか知らないけど、一人の人間の行動範囲なんてたかが知れてるし必要になれば聞けばいいか。

「その隣町にはどれくらいかかります？」

「早朝に出発してちょうど昼頃って感じね。仮にすぐ出発したくても、明日まで待ってね。まだまだ教えないといけないことがあるし、アンナも寂しがるだろうし」

「わかりました。まだまだご教授よろしくお願いします」

「そうと決まれば仕事は休みね。さっそく続きを教えるわよ」

さらなるヒートアップを遂げるクレアさん。薬師の仕事は大丈夫なのか。

「あの、さつき休憩だつて言つてませんでしたか？」

「大丈夫大丈夫。町に卸す分はできてるし、急患でもこない限り問題ないわ」

「さいですか……」

クレア講師による一般常識講座の途中、アンナちゃんが帰宅した。グランさんはまた自警団の集まりに向かったようだ。夕方まで続けられた結果、さしあたって生活に困らないだけの知識を得ることができた。お金の数え方、国家及び都市の関係、魔物による治安の影響などといった内容だ。戦う上で重要になることがあるらしいが、それはギルドで直接聞いてこいとのこと。

順序立てて説明された内容はこのようなものだった。まず今いる場所について。ここは、大陸の東部で国家体制は共和国の形で、明確に権力は存在しない。大きな都市は自治領で、周辺の村と互いに協

力関係にある。国会のない日本のような状態かな。東海岸の港からは離島であるゲッコウに行けるのだが、船が魔物に沈められるかどうか運任せのため、交流が難しいようだ。そのほかにも、南部には古代に強大な魔物を打ち倒した英雄を王とした王国が、西部には小国家を併合した帝国が、そして北部には亜人の国家が存在するらしい。

お金についてだがギルドは全ての権力に対し距離をおくため、ギルドが主体に共通貨幣を生産している。そのため国ごとに貨幣が変化することはないが、国は一種類の名誉硬貨を作成し、それはギルドで一般貨幣に交換できる。貨幣の種類は、金貨、銀貨、銅貨が存在し、金貨が一万円、銀貨が千円、銅貨は十円程度の価値を表している。価値比率は金：銀：銅＝1000：100：1となる。先ほどの名誉硬貨は金貨の上の価値になるらしい。

そして魔物について。発生原因はよく分かっていないが、おおよそ無尽蔵に発生しているらしい。また、その死骸は利用できるものも多く、ギルドでは冒険者への依頼で討伐、護衛、探索、採取などを通じて、より安全な世界を目指している。古代遺産の優れたアイテムも存在し、単に魔物を倒すだけがギルドの仕事ではないところが重要だ。

グランさんが帰宅し、一家全員プラス俺で夕飯を食べる。必要な情報はあらかた集まったわけだし、明日にでも隣町に向かうことをみんなに話す。クレアさんには事前に話してあったし、グランさんも事情がわかっていて承してくれた。だがアンナちゃんはちらをじーっと睨みつけたまま何も言ってくれない。そして、そのまま自室に戻ってしまった。なぜに怒らせてしまったかわからず困ってしまい、クレアさんに助けを求める。

「あの、俺なにか怒らせるようなことしてました？」

グランさんとクレアさんは笑いながら、

「まあ寂しがつてるんだろつよ」

「そうね。お兄ちゃんができたと思ってたのに急に家を出て行くなんて言われたらね」

「あ……それは考えてませんでした」

日本でも親戚の子供達に会ったときも同じようなことが何度かあったのを思い出した。まさかアンナちゃんにお兄ちゃん認定されていたことには気付かなかったが。

「ちょっと話してきます」

二階に上がり、アンナちゃんの部屋の前に立つ。

「アンナちゃん聞こえる？」

「……」

返事はないが、ちゃんと聞こえているはずだ。

「えつと……急にあんなこと言つてごめん。だけど、お別れなんてことはないんだよ。この家のみんなは俺の命の恩人だし、これからもお世話になるかもしれない。もしギルドに行つて一人でやっていくようになるっても、忘れずに顔を出すよ」

残念ながら反応はない。あとはそっとしておくべきかと思つて、そのまま自分の部屋に戻る。明日には機嫌直してくれば助かるんだけどな……

クレア先生の一般講座（仮）（後書き）

次回は隣町に向かいます。そして設定ラッシュからは逃げられません。ごめんなさい。

矛盾を見ついたり、誤字脱字を見つけたら感想のところに報告してもらえると助かります。単純に面白いかどうかも聞けたら幸いです。

ではこの辺で。

旅立ちの日

side:アンナ

今日は朝からおとうさんと薬草集めに出掛けている。秘密の場所も危険だから、一人でいけなくなっちゃったからおとうさんに付いてきてもらう。森に深く入らないように、安全を確認しながら自生する薬草を採取してまわる。おかあさんは家で調合作業をしてるから、リュウジさんの様子を見るようにお願いした。やけにおかあさんの機嫌が良かったので、どうしたのか聞いたら、「家族が増えたみたいで嬉しい」んだって。そしたら、私のお兄ちゃんになるのかな。一人っ子だった私はお兄ちゃんがどんな存在かわからないけど、あの優しくて私を助けてくれた人がお兄ちゃんになるのは、とても嬉しい。一緒に遊んだり、勉強したり、また私を助けてくれるかもしれない。それに、彼の近くにいるとなんだか気持ちが安らぐのだ。まるでおかあさんみたいな優しい存在に包まれているような。

家に帰ると、昨日みたいにおかあさんが彼にいろいろ話をしていた。やっぱり当たり前のことを知らないみたいで、お金のこととか物の値段を聞いたりしてた。昨日、遠くから来たっていったから、すごいなくなっちゃわないか心配だったけど、いろいろ勉強してるってことはきつと、ずっとここにしていることにしたんだよね。それじゃあ、明日から『お兄ちゃん』て呼んでみよう。驚くかな？喜ぶかな？できれば嫌がられないといいな。だけどその夜、思いがけないことになった。お兄ちゃんはこのをでて、隣町にいくって言い出した。私たちの家をでて生活していけるように、ギルドに向かうんだって

……

私は何も言えず、ただじっとお兄ちゃんの顔を見ていたんだけど、泣きそうになるのが我慢できなくて急いで部屋に駆け込んだ。そし

たら、お兄ちゃんが追いかけてきてくれてドア越しに声をかけてくれた。これはお別れじゃない、いつでも会える。わかってる、わかっているけど、なんだか胸のモヤモヤが取れない。別に離れたってお兄ちゃんはお兄ちゃんだ。私を助けてくれて、死にかけて、それでも私を大切にしてくれる。そして思い出した。お兄ちゃんが怪我をしたとき、私が何を思ったか。あのとき私は……

「おはようございます」

居間にいくと、クレアさんがグランさんに弁当を持たせているところだった。

「おう、おはよう。俺はこれから出るから見送りできなくてすまん」

「いえ、お気になさらないください」

村の近くに魔物が出たせいで、安全が確保されるまでは忙しいらしい。

「あの子、今日はまだ起きてこないのよ。拗ねてないでお見送りくらいしてあげればいいのに……」

「昨日のうちに、伝えたいことは言っておきました。きっと笑って見送ってくれますよ」

やれやれといった感じのクレアさんだが、すぐに本題に戻る。

「さて、出発にあたってお願ひがあるわ。パールワットには馴染み

の薬剤店があつて商品を卸しているのだけど、注文を受けてる分を届けて欲しいの」

そついつて共通語（俺にとって日本語）が書かれた紙と、ナップサツク程度の袋を渡してくる。

「構いませんがこの紙は？」

「注文書よ、その紙と袋を渡せば報酬が貰えるわ」

「分かりました。ギルドに向かった後、お返しにきます」

半日かかる距離らしいが恩人からの頼みを断る理由にはならない。体力が心配だが最悪お金を借りて次の日に帰ろう、と考えていると、

「いいのよ、急がなくても。家計には余裕があるし、リュウジくんの好きなときにまたこの村に来たときで」

「それって……」

「どこまでやれるか頑張ってみなさい。もちろんいつ帰って来ても構わないけどね」

つまりこれを俺の支度金にしてくれると言っているのだ。もしかしたらもう戻らないかもしれない自分に。俺としては世話になった恩を忘れるつもりはないので杞憂だが、今後何があるかわからない。クレアさんの心遣いに感謝し、ちよっぴり気合いが入る。

「それじゃ。行ってきます。お世話になりました」

頭をしっかりと下げる。そして、玄関の扉を開けようとしたところで大きな声をかけられる。

「待つて！」

「アンナちゃん?!」

階段を駆け下り、背中にリュック、腰にポーチ、遠出用のしっかりとした衣装に身を包み姿を現したアンナちゃん。見送りに来てくれただけとは思えない様子に面食らう。

「えと見送りありが……」

「私も一緒にいく！」

「…えっ!?!ど、どういうこと?」

もしや心優しいアンナちゃんは、俺を心配して道案内をかってくれるとでもいうのか。

「おかあさんいいでしょ?」

「いいでしょ、ってすっかり準備してるのを見ると断つても聞かないでしょうに」

アンナちゃんの問いに半分笑いながらクレアさんが答える。

「アンナちゃん。道案内役ありがとう。でも家の手伝いとか大丈夫?」

「何いつてるの？道案内はするけど、家の手伝いはいいわ。だってしばらくは帰らないんだし」

一緒に行くってそっちの意味か！

「一緒につて急にまた……」

「昨日、ドア越しに話してくれたから。会おうと思えばいつでも会えるって。だけどね、そうじゃないって思ったの」

こちらを真剣に見つめていう。その真剣さに息を呑む。

「森で手当てしたとき思ったの。絶対にこの人を死なせはしない、私の命の恩人が死ぬなんて許せない。何がなんでも助けるんだって。そのときはちゃんと助けられたけど、心配なの。この家を出て行って、昨日までこの世界のこと何も知らなかった人が生きていけるのか」

はつきりと言われるとあまり自信はない。頼りにできるのはこの家族しかないのも事実だし。

「だから、私が近くにいてあげる。大したことは出来ないかもしれない。だけど、私の知らないところで、お兄ちゃんが危険な目に合うのはだめなの！」

想いを爆発させて宣言したアンナちゃんの言葉。頼りない俺を見てられないとも取るのが普通だろう。そして頼りないのは自覚している。今俺が取る行動は一つしかない。

「クレアさん、本当にいいんですか？」

「仕方ないわ。大切にしておいてね。あと、いつでも言っただけになるべく早く顔を出すように」

「はは、わかりました。…じゃあアンナちゃん。これからよろしくお願いします」

「うん！」

アンナちゃんがニツコリと笑って返事をする。今後の身の振りが決まるまでアンナちゃんと一緒に生活することになるのかな。宿の手配とか大丈夫かな……

「そうそう、住所なら心配なくていいわよ。例の薬剤店に住み込みで働けばいいから。本当はリュウジくんの部屋だけ借りる予定だったけど、二人でも問題ないでしょうし」

「ほんと何から何まですいません……」

その薬剤店の空き部屋を借りて、俺はギルド通い。もしくは、何か職探し。アンナちゃんは住み込みのアルバイトみたいになるのか。……拠点が隣町に移っただけで相変わらずお世話になりっぱなしな気がする。

「では、これで出発します。グランさんにもよろしくお伝えください」

「ええ。二人とも元気だね。アンナも満足したら帰ってくるのよ？」

「はい」「わかった」

短い間だがお世話になった家を後にする。今日も見張りをする自警団の二人にも挨拶し、別れの言葉を告げる。

「何もないとこだけど、また来いよ〜！」

「どうぞお元気で〜」

二人に見送られ村を出る。さあ、隣町のパールワットまで出発だ！多少舗装された街道を目指して歩き始めると、アンナちゃんから声をかけられた。

「あの、リュウジさん」

「ん、なに？」

「えつとですね…これからはお兄ちゃんて呼んでいいですか？」

「お兄ちゃんか〜。うん、いいよ」

年齢的にもそれくらい離れてるし、生前妹がいた身としてはあまり違和感はない。家族を思い出し、俺が死んで迷惑かけたなと少し後悔する。

「では兄妹らしく、私のことをアンナ、って呼んでくださいね、お兄ちゃん」

「う、わかった。えと…アンナ？」

「はい！これからよろしく願いします、お兄ちゃん」

義兄弟の誓いならぬ義兄妹の誓いか……てことはあと一人枠があるな、なんてことを考えながら再び歩き始める。新しくできた小さい妹に、あまり迷惑かけないように頑張らないとな。

隣町そしてギルド。不安だけどアンナがいてくれれば何とかなる気がする。そして、そういえばアンナが出て行ったことをグランさんはどう思っただろうとふと思った。

旅立ちの日（後書き）

今週は時間ができたら書こうと思うのでゆっくり更新すると思います。ユーザー登録してお気に入りに入れると更新がすぐ確認できて便利みたいです。このサイトをよく利用する方はユーザー登録お勧めです。

感想・ご意見お待ちしております。では

隣町パールワット（前書き）

グランさんは、アンナちゃんを心配してますがクレアさんに逆らえず、むしろイチヤイチヤしてます。この両親と薬剤店の家主を絡めたサイドストーリーを書けそう（なノリ）なので、閑話として書いてみようと思ってます。

隣町パールワット

あれからしばらく歩くと、地面が多少舗装された場所にでた。舗装といってもコンクリートとか、ましてや石畳ですらなくただ草が生えていない程度だ。道中、分かれ道があつたりしたが東へと迷わず歩く。少し気になったのでアンナに聞いてみる。

「なあアンナ。この分かれ道の先はどこにいくか知ってる？」

「あつちの道をいくと、コズという村がありますよ。果物を栽培しているのが特徴ですね。たまにおとうさんが買いに行っていました」

果物というと林檎とかをイメージするけど、この世界の果物はどんな味がするのか興味があるな。町にいけば手に入るのだろうか？食料事情も気になるところだ。現代みたいに豊富な調味料や保存料とか存在しないのは、クレアさんの料理から想像できる。料理は確かに美味しいのだが、それはあくまで素材の味と料理の手際の良さからくるものだ。味噌や醤油など、親しんだ味はこちらには流通していない。もしかしたらこの世界の日本ポジションのゲッコウにいれば、近いものは見つかるかもしれない。……あれ、でも味噌醤油の発祥って日本で合ってるのか？

アンナといる話をしながら、1時間ほど歩いただろうか。話の内容は専ら世間話、主に俺の教養のためだが。そして、だんだんと景色が変わってきたことに気付いた。

「木が少なくなってきたな。森を抜けるのかな」

「このあたりからは草原が広がってますね。もうしばらく歩けば町

が見えてくると思います」

アンナは両親と何度か隣町に来たことがあるとのこと。これから向かう薬剤店の主とも顔見知りだそうだ。

「そのお店の人ってどんな人なの？」

「おかあさんの友達で美人な方ですよ。冒険者の頃から付き合いがあつたって聞きました」

「もしかして、その人も元冒険者？」

「はい。リゼルさんっていうんですけど、とっても強かつたらしいです。これはおとうさんから聞いたんですけどね。何回か大ゲンカしてひどい目に遭つたって」

「グランさんと喧嘩して、いい勝負するのか……」

なんか凄そうな人だな。性格わかんないからどうともいえないが、うまくやっていけるだろうか。これから会うその女性のことをあれこれ想像していると、

「あ、見えてきました。あれがパールワットですよ、お兄ちゃん」

言われて前を見る。見えない。目を凝らす。……見えた。かなり遠くにだが。そうか、もうしばらくでつくんじゃないかと、見えるっていったもんな……

「あはは……まだ結構あるんだね」

「そうですか？お兄ちゃんと一緒だとすぐついちゃいそうだけだなあ」

話しながらだと退屈はしないけど、歩き通しだと足腰に負担が来るよ……。ギルドで働ける以前の問題として、体力作りが必要になりそうだな。それに話自体も、今は教えてもらうことがたくさんあっていいけど、それが終わると話題に困る。ただでさえ話題を見つけるのが困難なのに、ましてこの世界でのコミュニケーション力なんて全然身についてない。アンナといつまでも仲良くしていければ文句ないけどね。

「まだ時間はあるそうだし、今度はあの町について教えてもらっていいかな？」

「うん。何が聞きたい？」

「うーん。建物の場所とかは、直接探したほうがよさそうだし、どんなものがあるか知りたいね」

「そうだね。おにいちゃんがいくギルドでしょ、それに最初にく薬剤店、町の入口近くには宿屋があつて、大きな食堂もあるね」

「ほうほう」

「あと、まわりの村でとれた物を集めて販売している市場があるよ。それと領主様が住んでるおっきな館も」

へえ、市場か。なにか売り物があれば利用できそうだな。まあお客さんとして顔を出すくらいだろうけど。

「わかった。他にもいろいろ教えてな？」

「はい」

魔物との遭遇もなく、途中馬車と一度すれ違った程度で、ようやく町の入り口にたどり着いた。町には8mほどの外壁が備わっており、出入り口は制限されている。この門は幅5mくらいで、横に衛兵の詰め所も見受けられる。ここにも見張りが立っていて、その格好は体の要所を含めた広い範囲を鈍い色の鉄製の防具に覆われ、如何にも衛兵という気配を漂わせていた。顔が分かる距離まで近寄ると声をかけられた。

「ようこそ、バールワットへ。お二人は近くの村の人かい？そつちの君は東方の出身のようだが」

おや？東方って単語がここで出るということは、やはり黒髪は珍しいのか。困ったな。そんなやつが急に村に沸いたなんて少し怪しく思われるか……

アンナにチラリと視線を向けると、任せてと言わんばかりに一歩前に踏み出した。ここはアンナの機転に任せてみよう。

「はい、私はラピの村から薬剤を届けに来た薬師です。この人は私の村に滞在されてた商人の息子さんなんですが、先日現れた魔物に襲われた私を助けようとして……」

そうきたか。いや無茶振りじゃないかこれ。えーっと、子連れの人人が不慮の事故で亡くなったと、あと俺は商人の息子か。アンナを助けたときの俺が父親の設定か。じゃあ、俺がこなす役割は……

「私、この少女の村にてお世話になっておりました、リュウジ・キラタニと申します。父のツテもなくなり商人として生きていけず、また父の無念を晴らしたく、冒険者になろうと出向いた次第です」

「それは…、なるほど商人の。ご親族の勇氣に敬意を表します。つらいでしょうが、冒険者になろうと決意されるとは。一人の男として応援します」

「ありがとうございます。立派な父に負けぬよう頑張りたいと思います」

「冒険者を始めるとなるとギルドに登録なさるのですね？ギルドの場所をご存知でしょうか？」

「いえ、よければ教えていただきたいです」

「ここから見える大通りの先に、棘のついた盾をあしらった看板を掲げた建物があります。勘違いされやすいのですが、冒険者ギルドは盾の看板を、戦士ギルドは剣の看板を掲げております」

「わかりました。盾の看板ですね」

「ええ、ではご健闘を」

「どうもありがとうございました」

一連の会話をこなし、門を抜ける。見張りの方に声が届かないあたりまで歩いてからアンナに話しかける。

「さっきのは緊張したよ。なかなか際どい振りだったね」

「そう？お兄ちゃん完璧に役になりきってたと思うけど」

「ああいう状況はいろいろ経験してるからね、知識の上でだけど。今後は打ち合わせなしにはやらないでくれると助かる」

「はい」

「さて、それじゃリゼルさんのお店に向かおう」

「お店は宿屋の裏通りにあるよ。ついてきて」

アンナの案内を受けて家々の間を歩く。やがてアンナの家で嗅ぎなれた匂いがしてきた。ついたよ、というアンナの声に答えその建物を見る。二階建てで周囲の家とあまり変わり映えしない。これからお世話になる大家さんとうまくやれますようにと祈りながら、その家の扉をノックした。

隣町パールワット（後書き）

気づけばPVが一万越えてました。常連さんを表すユニークアクセスはだいたい200〜300人くらいでしょうか。

何人が評価ポイントをいれてくださり、5点満点もあつてやる気と共に、読者の意見として参考になります。文章の書き方や物語の展開などについて、感想にかくまでもないときは、こちらの評価ポイントを利用してくださると嬉しいです。

冒険者ギルドへ（前書き）

今回も説明のおかげで文章長いです。後半にゲーム風にステータス表を載せました。

冒険者ギルドへ

「はい、どちらさま？」

芯の通ったハスキーな声と共に扉が開けられる。顔を出したのは、金髪ロングの女性で、クレアさんに負けず劣らずの美人だ。クレアさんはお母さんオーラが出ているが、この人はまだお姉さんで通じるだろう。こちらを見て一瞬怪訝な表情を浮かべるが、俺のすぐ後ろにいたアンナに気付くと途端に笑顔になる。

「あーら、アンナじゃない！よく来たわね。今日はお母さんと一緒にじゃないの？」

と凄い速度でアンナに抱きつき、辺りを見回す。なんだこのお姉さん、アクティブすぎるぜ……

「リゼルお姉ちゃん、お久しぶりです。今日はお母さん達はいません」

「あら、あのハゲがいないのは構わないけど、クレアがいないのは残念ね」

ハゲって言った！今ハゲって言ったよ！

「でー？こちらの冴えない野郎は一体何様なんだい？」

「えーっと自己紹介の前にこちらを。クレアさんからの預預かり物ですっ？！」

クレアさんの名前を出した瞬間、依頼書が奪い取られる。なんだよ畜生、速すぎて手が見えなかったぞ…怖え。

「なになに……。ああ、薬剤の搬入か。それにまだ付け加えてあるな……」

気付かなかったが、裏面にはクレアさんがなにやら書き足していたらしい。それを呼んでリゼルさんは溜め息をつく。

「はあ…アンナがうちに泊まってくのは大歓迎だが、なんでこんな奴まで面倒みないといけないんだい」

と言いつつ、こっちを見てくる。やべえ、フレンドリーとは無縁だよこのお姉さん。今すぐ追い出されるんじゃないだろうか。などと内心ビクビクしていると、

「リゼルお姉ちゃん、リュウジお兄ちゃんは私の命の恩人なんだよ！お願いだから仲良くして！」

とアンナが救いの矢を放ってくれる。そして、リゼルさんはなぜか絶望したような顔をしてアンナと俺を交互に見ている。

「あ、あの…どうかしたんですか？」

「…ハッ、いや、な、何でもないよ。ちょっと嫌なことを思い出しただけさ。そうかい、アンナの命の恩人ねえ。そういうことなら多少の便宜を図ってやってもいいか」

何かのショックから立ち直り、そう言ってくれる。どうやら泊めてもらうことには成功したようだ。

「それじゃ空いてる部屋に案内する前に、持ってきた荷物出しな」

言われて、リュックから薬剤をまとめて出す。確認が終わったのか、リゼルさんが部屋に入っていた。戻ってきたときに、その手に何枚かの銀貨が握られていた。「面倒だから細かいのは、サービスしとくよ。とりあえず銀貨8枚、無駄遣いすんじゃないよ!」

薬代を受け取り、ポケットにいれる。その後、アンナは二階の、俺は一階の部屋にそれぞれ案内された。アンナが、俺も二階の隣室に泊まるようにお願いしたが、

「冒険者として働くんた。疲れきったやつに階段はきついだろ」

とのことで認められなかった。じゃあ一緒に部屋で、なんて言われたら俺の一生が終わりそうな気がしたので俺からもアンナを説得した。

とりあえず一息ついて、早速ギルドに向かおうと思う。時刻は昼過ぎ。先ほど町の中心から大きな鐘の音がしていた。時計はあるにはあるのだが、個人が所有するものは数が少なく精度が悪い。俗にいう時計塔がその町の時間を管理しているらしい。冒険者ギルドは、役場の受付みたいなもので、依頼の受注、斡旋、素材の売買まで何でも屋に近い形態で運営しているらしい。朝は依頼の斡旋、夜は依頼報告や素材の買い取りで忙しくなるからスムーズに登録したければこの時間がベストだとリゼルさんに教えてもらった。

「えっと、初期登録及び訓練に銀貨3枚を忘れず、しっかりと説明を聞いてくること、か」

俺は今、銀に輝く盾の真下にいる。冒険者ギルドを表す看板のすぐ真下だ。リゼルさんに言われたことを思い出し、勇気を出して扉を開け放つ。

「す、すいませ〜ん」

……反応がない。これは想定外だ。あれ？ここギルドだよね、空き家とかじゃないよね？気合いが空回りし、呆気にとられていると、広いロビーの向こう側、カウンターに見える場所で誰かが突っ伏している。……あれ寝てるのか？一応、声をかけようと近くに行く。

「あの〜起きてください」

呼んでも反応がないので、仕方なく揺すって起こそうと思い、肩に手をやる。そして頭をわずかに揺すった瞬間、

「ね、寝てません！だからお給料下げないで！」

「グハツツ!？」

いきなり顔をあげたため、俺の顎に華麗な頭突きが炸裂する。畜生、心配してやった礼がこれか！己の不幸を恨みながら痛みがひくまで地面にピクピクとうずくまる。

「あ、あの〜大丈夫ですか？」

そんな俺を見て声をかけてくる居眠り事務員。顎に受けた衝撃がひくまで、もうちょっと待ってください。

「はあ……酷い目にあつた」

「あう、すみません……てつきり上司が起こしにきたのかと……」

身長は小さく、アンナより少し大きいくらいか。髪はショートで、薄い水色の髪が綺麗だ。日本人の俺からしたら、西欧人に見えるこの世界の人は大概美人に見えるが、彼女は綺麗というより可愛いと表現すべきか。

「まあ悪気があったわけでもなし、痛みもひいたからよしとします。で、ここは冒険者ギルドで合ってますよね？」

「すみません……。確かにここは冒険者ギルドで、私は受付担当のミルザと申します」

「そうですか。俺は桐谷龍司といいます。ギルドに登録したくてきました」

「な、なんと！冒険者志願者さんでしたか！」

いきなりテンションをあげてくるミルザさん。志願者が珍しいのだからだろうか。

「そんなに驚いて、志願者が珍しいんですか？」

「いえ、ノリで驚いてみただけです」

誰だよこの子可愛いとか言ったの。アホの子じゃねえか。……いや、アホの子だから可愛いのか？

「……まあいいか。それで登録の方は大丈夫ですか？」

「はい、ご覧の通り暇ですので早速始めましょう」

そっいつてカウンターの下から冊子を取り出す。

「それでは説明させて頂きます。まず、ギルドの名称・及び目的についてですが」

「あ、知ってます」

先ほどのお礼に少しからかってやろうと茶々を入れてみる。

「あにや？なら飛ばしてもいいですね」

……いやよかないだろ！？そこ一番重要なところじゃないの！？だめだこの子、下手に弄ると不利益を被りかねん……おとなしく聞いているか。

「で、ですね。ギルドには関連組織として戦士ギルド、魔術師ギルドギルド、盗賊ギルドが存在しております。あ、これも知ってます？」

「いいえ、全く知りません。詳しく説明お願いします」

とキツパリ言うと、残念そうな表情でこちらを見たあと手元の冊子を使っせとめくりだす。お前、やっぱりサボりたいだけなんじゃないだろうか。上司とやらに会ったら一言文句を言ってやろう。

「ええつとですね。冒険者ギルドは多岐に渡る業務内容のため、専門分野ごとに関連組織が存在しております。戦士ギルドは、冒険者の育成から武具の販売・強化まで、主に戦闘に関連する組織です」

「冒険者の育成ってどういうものでしょう?」

「ああ、それは熟練した戦闘技術を広め、若手の戦力の増強を目的としたものですよ。戦士ギルド所属の人なら安い料金で参加できます」

「なるほど」

「では次に魔術師ギルドですが、個人の魔力を測定したり魔法の基本を学ばせることで強力な魔法使いを育成し、知識の収集により薬学や錬金術などの発展にも貢献しています」

目当ての魔術師ギルドは魔法学校みたいなものなのか?これなら魔力があればなんとかかなりそうだ。

「最後に盗賊ギルドについては、泥棒集団ではなく、特殊な技術や情報を扱い、戦闘以外での補助を扱う組織です。中には非常に高額で取引されるものもあります」

盗賊ギルドはよく盗品を売りさばく場所ってイメージがあるけど、ここでは情報屋の側面が強いな。特殊な技術ってのが気になるけど、よくある鍵開けとか罍解除とかなのかな?

「以上の組織が冒険者ギルドの下位に存在しており、冒険者の基本は冒険者ギルドに登録後、自分に合った分野にも続けて登録ですね。登録料金が増えますが複数の組織に所属も可能です。登録までは以上ですが、続けてギルドランクの説明に移ってよろしいでしょうか?」

「ギルドランクですか？是非お願いします」

「はい。ギルドランクとは主に冒険者の格を表す基準であり、依頼実績、ギルドへの貢献などにより左右されます。高位のランクになれば、組織での権限も増します。ランクはS A B C Dの月記号のどれかと1から5の数字で表記され、D 5が駆け出し、S 1が最高実力者、権限でいえば下端とギルドマスターの違いがあります」

「冒険者をやっているれば自然とランクが上がっていくんですか？」

「ランクの査定方法ですが、各ランクで100P^{ポイント}を獲得したら昇格試験を受けることができます。これに受ければ晴れて次のランクになります。高ランクは実力に見合った報酬に加え、名声を高めることにもなるため、是非最高ランクを目指して頑張ってくださいね。まあ才能がないとA 5になることも難しいですけど」

D 5から始まってS 1まで目指すと24回も試験があるのか。まあ才能なんてないし、冒険者やってくならよくてB 1が目標かな。

「わかりました。他に聞いておくことってあります？」

「あとはギルド加入の注意事項ですね。えーと、ギルドは冒険者の怪我や死亡に対して責任を持たない、ギルドに不利益をもたらす者は警告のち追放、ギルドからの正式な依頼は断ってはいけない、などなど…」

「いやいやいや、省略しちゃだめでしょそこ」

「うう、だって無駄にたくさん書いてあるんですよ！重要そうなのだけわかれば問題ないです！」

「重要だから記載されてるんじゃない……仕方ない。ちょっと見せてください」

駄々をこねるミルザさんから冊子をひつたくるように奪い文章に目を通す。……確かに似たようなありきたりな内容だな。オンラインゲームでよく規約とか読んだけど、それとあまり変わらないかな。

「はい、ちゃんと読んだので大丈夫です。これで終わりならギルドに登録したいのですが」

「わかりました。では登録料として銀貨三枚いただきます」

銀貨三枚をポケットから取り出し、カウンターに置く。

「はい。ではついてきてください」

そういつて席を立ち、横にある扉から別の部屋に移動する。置いて行かれないように後ろを歩く。隣の部屋は広めの部屋で、地面に英語で掘られた魔法陣があった。英語もとい月語は失われたのではなかっただろうか？なぜこんなところに……

「来ましたね」

いきなり背後から、落ち着いた男性の声。ビビってその場を飛び退く。

「ああ、驚かせてしまい申し訳ない。私、このギルド支部の代表を勤めます、シグナムと申します。ギルドカード発行に立ち会いますゆえよろしく願います。ミルザくんは受付に戻ってくれたまえ」

現れたのはひよろりとした体格の男性。歳は四十代くらいか、よく漫画に見る執事のような穏やかな感じがする。素敵なおじ様ってやつか。ミルザさんが一礼して部屋をでる。

「あ、はい。よろしくお願いします…」

しかし、立ち会いつて何かあるのかな。そういえばこの魔法陣ってギルドカードに関係あるのだろうか。

「それではこのカードを持ち、あの魔法陣の中心にお立ちください。カードは絶対に手放さないようお願いします」

差し出されたのは、クレアさんに見せてもらったのと同じカード。だが、名前など何も書いてない。触ってみてわかったが、プラスチックのような軽い金属でできていた。とりあえず言われた通りカードを受け取り、魔法陣の中心に立つ。

「よろしい。では始めます」

『神々の英知よ、我らを写す鏡の欠片よ、彼の者の真実を刻み給え：
イノセントミラー』

シグナムさんが唱えた呪文に呼応して、足元に光が満ちる。その光はやがて光の筋になり俺の体を這いずるように照らしだす。初めて魔法を見た俺は、最前列でマジックショーを見たかのように感動しその光景に圧倒されていた。やがて光は体を通って手元に集まり、そのままカードに吸収されていく。光がおさまり、立ち尽くす俺にシグナムさんが声をかける。

「ご苦労様でした。無事ギルドカードの発行が完了致しました。ど

うぞご確認ください」

言われてカードを見る。左側に自分の名前、性別、職業などが彫り込まれ、右側には大きくD5と表示されている。

「ではギルドカードについて説明致しましょう。素材は魔力鉱を溶かし込んだ鉄でできており、軽く丈夫でかつ魔力伝導率に優れております。傷がつきにくいいため多少は粗野に扱っても問題ありませんが、紛失にはご注意くださいませ。その際は再発行にお金がかかります」

特別な金属なのだろうか。じっくりカードを見てみると、裏面にも何か書いてある。アルファベットと数字が表のように分けてあつてよく見るとそれはSTRやVITと書いてある。

「シグナムさん、この裏の文字と数字は一体何なんですか？」

どれも見慣れた単語であり、確かな期待を持ってシグナムさんに確認する。

「ギルドカードは、表には名前や職業、ギルドランクといった一般情報が。裏には個人の力量を表すための数値がステータスとして表示されます。一度作成されたカードは本人と魔力で繋がっており、所持していればそのつど更新されていきます。これは自身の適性を知る上でも参考になるので、よく見ておいてくださいますよう」

やはりこれはステータス表なのか！スポーツテストや学力テストをしなくても、自分の能力がわかるじゃないか！ああ！シャトルランでヒイヒイいながら走ってたのを思い出しまった。

「STRは筋力を、INTは知性を、PIEは信仰心を、VITは

耐久力を、DEXは器用さを、AGIは素早さを。そしてLUCは運氣を表します。数値は0から100まであり、高いほど優れているといえます。それから……」

英語を理解しているため説明は不要だったが、一応ウンウンと頷いておく。今は自分の能力を確認するのに夢中だった。予想通りといえばそうなのだが、筋力と耐久力、器用さと素早さがくそ低い。反して知性と運氣は悪くないのだが、一番すごいのは信仰心だ。その信仰心なんだが……1と表示されていた。確かに異世界の神様なんて知らないから仕方ないといえるのか、この1もクレアさんの話を聞いたおかげなのだろう。

「もし、ちゃんと聞いておられますか？」

「は、はい！聞いてます！」

びつくりした。途中から全く耳に入らなかった、なんて言えずそう答えた。

「説明は以上で終わりです。何か質問はございますか？」

「いえ、大丈夫です」

「では、このあとは各ギルドで訓練を受けるのをお勧め致します。依頼は山のようにあるので、お急ぎにならずとも大丈夫ですので」

シグナムさんと部屋を出てロビーに戻る。受付にはミルザさんが、今度はちゃんと座っている。こちらに気づいて声をかけてくる。

「お疲れ様でした。これで依頼を受けることができますね。早速見ていきます?」

「残念だけど、まずは魔術師ギルドに向かいたいんだ。場所を教えてくださいませんか?」

「魔術師ギルドは、この通りを右に向かっていけば魔法陣を描いた看板が見えるので、そちらへどうぞ。あ、魔法陣は、ギルドカードを発行した部屋でご覧になりましたよね?」

「はい、それならすぐわかりそうですね。ではこれで失礼します」

魔術師ギルドの場所もわかったし、冒険者ギルドをあとにしようとする、

「あ、そういえば名前。良かったら教えてくれませんか?」

そう言われ、まだ彼女に名乗っていなかったことに気付く。これからお世話になるのだからちゃんと挨拶しておくべきだった。振り返り改めて自己紹介する。

「俺の名前はリュウジです。なれるかわからない魔術師志望ですが、よろしくお願いします」

「はい、リュウジさん。新人同士、これから頑張っていきましょう!」

にこやかな表情で送り出され、これからのギルドでの活動に期待が膨らむのだった。

主人公ステータス表

リュウジ・キリタニ（桐谷龍司） 22歳 男

STR	30
INT	60
PIE	1
VIT	30
DEX	40
AGI	30
LUC	60

近接戦闘は苦手。異世界出身ゆえ信仰心が低い。ファンタジーな魔法にはゲームで慣れ親しみ、科学的な知識も多少あるため、魔法のイメージがこの世界の人間よりも遥かに得意。余談だが、信仰心は信仰呪文に、知性は魔術呪文に影響する。

典型的な魔術使いになる可能性を秘める。

最初のゴブリン戦ではLUCの高さに助けられ、VITの低さゆえ死にかけた。

冒険者ギルドへ（後書き）

例によってご意見・ご感想お待ちしております。

それと、設定みたいなのは本文中、もしくは別枠どちらで書いたほうがいいのか悩んでいます。まずは本文中に話の流れで載せて、いつかまた修正するかな。

魔術師ギルドへ

冒険者ギルドを出て、次は魔術師ギルドを目指す。自分のステータスを見る限り、知性と運くらいしか誇れるものがない。ゲームでいえば、知性は魔法攻撃力、運はクリティカル率とか確率調整な気がするが、実際にはどうなんだろう。あとでミルザさんに聞いて……いや、冊子を借りた方が早いな。とりあえずあとは魔力が備わっているか確かめないと。どうやら冒険者ギルドではギルドカードには魔力を表示できず、魔術師ギルドにて測定する必要があるらしい。シグナムさんの説明がうる覚えなので、まだ何か言っていたかも……

考えることをしていると早いもので、目当ての看板を見つけた。魔法陣とさらにその中心に目が描かれた、少し不気味な看板だ。どうやらこれが魔術師ギルドの建物のようなのだ。

ギイと軋むドアを開けて中に入る。冒険者ギルドに比べて小さなロビーには紫色のローブを着た女性が一人。やはり受付は女性なのはこの世界もかわらないのか？

「ようこそ、魔術師ギルドへ。初めてみる顔ね。どんなご用件かしら？」

とりあえず魔術師ギルドにも登録しておかないとな。

「さっき冒険者ギルドに登録したばかりなんですけど、魔法に興味があつて参りました」

「そう……見たとおり新人さんのね。ギルドカードを見せてもらっていいかしら？」

胸ポケットからカードを取り出し、彼女に手渡す。

「リュウジ・キリタニ。魔術師としての素質は高めだけど、信仰心が恐ろしく低い。これじゃあ魔術呪文専門かしらね」

また魔術呪文という言葉が聞こえた。クレアさんには聞けなかったし、ここで確かめておくか。

「あの、魔術呪文って何なのでしょう。信仰呪文というのもよくわからないのですが……」

「あら、系統をご存知なかったのね。魔法を扱うには二通りの方法があるのだけれど、一つは術者自身の意思とイメージで魔法を発現させる方法。これが魔術呪文になるわ。もう一つが、イメージにくい効果を発現させるために、神々をお願いする方法。これが信仰呪文よ」

「神様をお願いするんですか？」

「ええ。信仰する神によって得意不得意はあるけれど、傷を癒やしたり運勢を変えたり、目に見えない現象を扱うことができるの。もっとも理解できれば同じ効果を魔術呪文で行使することも可能よ」

理解できるってことは、体の仕組みや細胞のことを知ってれば回復魔法が使えるかも知れない。なんせ信仰心が1しかないから、耳を貸してくれる神様なんていないんだろうなあ……魔術呪文しか可能性が見えない。

「えっと、それで魔術師ギルドには登録してもらえますか？」

「まだギルドの説明もしてないのに、焦らないで。魔術師ギルドでは魔法の初歩的な訓練や錬金術の基礎を学べたり、魔法の発展を目指し協力することができるわ。魔法は高位の者になれば強力な力を発揮するため、魔法を使う者の情報を管理する組織でもあるわ。この説明を聞いて、所属する意思はある？」

「はい、是非お願いします。魔法を使えるか試したいんです」

魔法という可能性のためにここまで来たのだ。やめる道理などない。

「よし、それじゃあ魔力測定をしてカードに登録しちゃいましょう。これから別室で、魔力の測定を始めますがいいですね？」

「はい！」

「それではこちらへ」

促され、部屋を移動する。冒険者ギルドのときは魔法陣に出迎えられたが、今回もそうなのだろうか。廊下を移動し、部屋に入ると予想とは違い、小さな部屋の中に水晶のような丸い球が安置されているだけだった。

「ギルドカードには魔力値は記載されないので、しっかり確認する必要があります。精神の成熟などによって魔力値が増大することもあるので、定期的な検診をお勧めします。一応見届け人が必要なのでしばらくお待ち下さい。受付を空けたままにはできないので交代を呼んできます」

そう言うと紫ローブの女性は俺をおいて部屋から立ち去った。見届

け人というのも情報統制のために必要なんだな。待つてる間暇だし、気になる水晶に手を伸ばしてみる。見た目はよく占い師が持つてそうな外見で、大きさはボーリング球くらいある。重いのかな、と思つて両手で支えようとした瞬間、部屋の扉が開けられると共に、目の前に真つ白な光が現れ両目を焼かんばかりに照らした。

「うわっ!？」

焦つて手のひらを離す。雷でも落ちたような光だつたが特に変化はなく、入ってきた人も気づかなかつたようだ。

「まったく。研究の最中に呼び出しやがつて……。おたくが測定希望者かい？見てやるからさつさと水晶を両手で持ちな。あ、持ち上げる必要はねえぞ。触るだけだ」

今度は緑のローブを着用した男性だった。眠たそうなだらゝい表情をしながら作業の説明をしてくれる。しかし、両手で触るのはさつきやつて、凄い光が発生したような……

とりあえず言われた通り水晶に手をやるが、なんだか最初よりくすんだ光がでているような気がする。それを見た男は、

「グレイライトか、つまらん。見届けは終わつたから俺は戻る。聞きたいことがありや受付にいるローザに聞きな」

と言ひ残し、さつさと歸つてしまった。……とりあえず男性がいったグレイライトの意味を聞きにロビーに戻ろう。

「それで、グレイライトって言われたんですが」

受付に戻って、新たに魔術師ギルドに登録した証が刻まれたギルドカードを受け取るついでに質問する。

「魔力値を計ったときに生じる色や輝度によって、名称が付けられるのよ。くすんだ白い光はグレイライト。ハッキリいえば魔力値としては最低クラスね。」

「最低クラスですか……」

宝くじを買うようなものだと思ってたが、どこか期待していた分残念だ。

「まだ駆け出しだから、可能性がある分悲観しなくていいわ。一応言うておくと、グレイライトの次はブルーライト、イエローライト、レッドライトと変化して輝きが増していったって、確認された最高峰クラスのピュアライトも存在するわ。ブルーライトくらいなら可能性はあるし、気を落とさないでね？」

慰められたが、やはり天性の才能というか生まれ持ったものが大きいのは仕方ないことなんだろう。まあ、魔力がゼロでないことは確認できたし、次は魔法の使い方だな。

「わかりました。頑張ってみます。それで、早速魔法の使い方について教えてほしいのですが」

「ええ、わかったわ。それじゃあ明日、朝9時の鐘がなるころにまたいらしてください。簡単な座学と昼から実習を行いますので」

「了解です。では失礼します」

魔法の講義を受けれるのは、かなりありがたい。魔術師ギルドを設立した人に感謝だな。次は明日の講習の結果を見て、魔術師の実力を考えてから身の振りを決めるとしよう。

魔術師ギルドを後にしてリゼルさんの店を目指す。気づけば、夕日が見えお腹も減ってきた。早く帰って晩御飯をいただくとうとう。

side:ローザ

久々に新しい子が来た。ステータスと魔力値が釣り合っていないのが残念だけど、今後に期待するしかない。明日の講習に備えて資料をひっぱりだしとかなきゃね。

受付の込み合う夕方も過ぎ、あたりがすっかり暗くなるうとした頃、廊下を歩いていると部屋から光が漏れてることに気づいた。

「あら？測定室に誰かいるのかしら」

うちの誰かが使ってるのかもしれない。戸締まりをしっかりしてくれるなら問題ないし、そのときは気にせず部屋を離れた。

次の日の朝、講義室に資料を運び準備をしているとギルドの研究者の一人が訪ねてきた。

「なあ、さっき魔力測定器を使おうとしたんだが、曇ったままで光らねえんだが壊れてないか？」

「えっ？曇ってるってどういうことよ」

「いやな…触ってもないのにうつすらと曇ったままだし、いざ触っても反応しねーんだわ。予備のやつ倉庫から出しといてくんねえか？」

「そういうことならいいですけど……」

「おう。じゃあよろしく頼むわ！研究室にいるから、準備したら呼んでくれよな」

じゃ、と言いつ残し去っていく。一体いつから壊れてたんだろう？昨日新人の測定のときは問題なかったみたいだし、もしかして昨晚の明かり……

いや深読みは意味ないわね。わざわざ機材を壊す人なんていないだろうし。はあ、余計な仕事が増えちゃった。九時の鐘が鳴る前に終わらせないと。

魔法使い始めました

「それで、ギルドには無事登録できたわけだ」

「はい。いろいろ説明が多かったけど、なんとか」

「おめでとうお兄ちゃん！これで一步前進だね」

リゼルさんの自宅で夕食を取りながら、ギルドでの出来事を話す。
リゼルさんは料理は苦手らしく、アンナが来たおかげで美味しい料理が食べれると喜んでいた。

「しかし、ステータスの割りに魔力が絶望的だねえ。その辺の課題をクリアしないと魔術師としてはつらいよ？」

「やっぱりグレイライトだとダメなんでしょうかね……」

「ん〜説明されたろうけど、魔法を発現させるイメージとそれを伝える手段が洗練されればされるほど、魔力の消費量は減るからね。うまくやれ、としか言えないよ。あ、ちなみに私はブルーよりのイエローライトね。中の下つてとこかしら」

「はあ……つまり俺は下の下だからやりくり上手じゃないとダメってことですね」

「大丈夫、いざとなったら薬師になればいいよ！私がしっかり教えてあげる」

「ありがたやありがたや……しくしく」

アンナの方は上手く手伝いをこなしているようだ。リゼルさんはアンナに激甘で、孫を可愛がるおば……なんでもない。とりあえず問題なく過ごしたとのこと。アンナの世間話に付き合っていると、気づけばだいぶ時間が経っていた。明日は遅刻しちゃいけないし、そろそろ休むとしよう。

「そろそろ寝ますね。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ。もし寝過ぎしても叩き起こしてやるから安心しな」

「おやすみなさい」

こちらに来てから規則正しい生活をしてるなあ……夜は暗くて仕方ないってのもあるけど。明日は九時に集合だし、八時前には自然に目が覚めるだろうし問題ないかな。それじゃあおやすみなさい……

次の日、何事もなく時間通りに魔術師ギルドに到着した。九時を知らせる鐘の音がまだ鳴る前に受付を済ませてしまおう。

カウンターに座るローザさんに挨拶し、講義室へと案内される。黒板といくつかの座席があり、慣れ親しんだ大学の講義室を連想させる。講義室にはすでに何名か集まっていて、こちらを見る人もいれば全く気にかけない人もいた。

「さて、今日魔法の講義を受けるのはこれで全員ね。担当官を呼んでくるので少し待っていてください」

ローザさんが部屋を出て行く。講義が始まるまで、まだ時間があり

そうだな。他の人たちに興味があり、チラッと見てみる。部屋にいた人数は三人の男女。男二人に女一人だ。まず特筆すべきはその年齢だろう。皆、俺より若く、14〜16歳くらいに見える。冒険者を始めるのは、だいたいこれくらいの年齢からなのだろうか。だとしたら俺は相当ずれてることになる。気にすることでもないけど。これで年齢が近ければ話しかけられたりもするのだろうが、一人大人びている俺に話しかける人はいなかった。

少しして誰かが講義室に入ってきた。四十代くらいのおじさんで、なかなか渋いイメージを醸し出している。

「皆、おはよう。私が本日初級指導を担当するデビッドだ。新たな同士の誕生に立ち会えて光栄に思う。まずはじめに、名前と魔力等級を自己紹介代わりに述べてくれ。では、窓際のほうから始めてくれ」

魔力等級って何だ？と考えていると、一番窓際に座っていた少女が起立してしゃべり出した。

「グリシーヌです。魔力等級はイエロー」

そう言うのと席に座った。それを見て次の少年達の自己紹介が続く。

「俺はディオ。魔力等級はブルーっす」

「僕の名はアラン。魔力等級はレッド」

アランと名乗る少年の自己紹介で、担当官を含めた、俺以外の三人が驚いたような声をあげる。

「ほう、レッドライトか。これは逸材かもしれんな」

「レッド……」

「すげえな、最初からレッドかよ」

話をまとめると、魔力等級は最初に測定したあの魔力値のことだな。しかしブルーイエローレッドと揃い踏みか。俺だけグレイってのは残念だ。

「俺の名前はリュウジです。魔力等級はグレイです」

「よし、これで自己紹介は終わりだ。魔力等級に差があるからといって差別はしないから安心しろ」

とこちらを見ながら語るデビッドさん。まあレッドとグレイを比べたら凄い差があるのはなんとなくわかります……

「では座学から始めよう。わからないことがあればどんどん質問してくれて構わん」

それからしばらく、魔法についての授業を受けた。今まで聞いたことの復習であつたり新たな知識を得たりと有意義な時間だった。

魔法とは意思の力で世界を改変する術である。魔力とは意思を世界に伝える糧である。これを基本として、魔術呪文と信仰呪文、さらに精霊呪文が存在すること。精霊呪文は召還魔法のように精霊を呼び出し使役することを示す。

次に、呪文について。言語体系については以前聞いた通り、月語が最高言語、ルーン語が中級、共通語が下級の位置付けだ。魔法を使いたいならルーン語をいくつも知る必要がある。日常的に利用され

るドアとかなら認知度は高いが、火、氷などは分かるが、火炎、凍結となった途端わからないらしい。なんだか日本の年寄りみたいな語学力だ。うちの祖母を思い出した。アイスはわかっててもフリーズはわからない。ファイアはわかっててもフレイムはわからない……

呪文と魔力の関係だが、簡単に表すと呪文は魔法の設計図であり、明確であればあるほど効果が高い。そして魔力は設計図を書くためのインクだ。魔力が高ければ、多少あやふやな設計図でも輪郭がハッキリするためカバーできる。もちろん設計図を読み取り実行するのは世界そのものだ。信仰呪文は、神様に設計図を作成してもらう分、魔力の消費量が増えるが、魔術呪文は完全に己の力量が試される。

最後に魔力の扱いについて。魔力はインクだと先ほど言ったが、その使い方は言葉に乗せるイメージらしい。具体的には、明確な意思を持って発声することで、言葉は魔力を伴う呪文となり、魔力が消費される。じゃあ寝言で魔法が発動したりするのかと聞いてみたが、よほど意識がハッキリしていないと無効みたいだ。が、過去に発動した実例が存在すること。

ここまで教わって、質疑応答の時間や休憩を取ったりしていると昼になった。

「よし、では昼休みを挟むとしよう。午後からは実際に魔法を扱う。飯食って気合い入れとけ」

ギルドには職員が利用する食堂があり、一般人も利用可能なのでそこに案内された。他の三人はすでに打ち解けたようで同じテーブルに座るみたいだ。

「おばちゃん、この日替わり定食お願い」

「あいよ。銅貨十枚だよ」

「ほい」

「テーブルで待つてな。出来たら呼ぶよ」

とりあえず料理ができるまで適当な席で待つか。そう思っていると、先ほどの三人に声をかけられる。

「なあアンタ。一人なんだろう？俺たちと一緒に食おうぜ」

確か、アラン……じゃない、ディオと言ってたな。

「いいの？」

「なに遠慮してんだよ。みんな初対面だし、同じギルメンだろ。いいからこいよ」

促され同じテーブルにつく。

「で、リュウジは少し歳上みたいだけど敬語使うほどじゃないよな。俺今16だし」

「まあ俺は気にしない方だからいいけど」

「だよな！ほら言った通りだろ？意外と親しみやすいタイプだって」

「……意外」

「ディオの言うとおりだったね。ごめんごめん」

どうやらディオの提案で招いてもらえたようだ。少し感謝。

「しかしグレイかぁ。俺たち三人とも魔術師目指してるんだけど、リュウジも魔術師志望？難しいんじゃないか？」

「そうだね。魔力が低いというのは大きな課題になりうる」

「レッドのアランが言うのは嫌み……？」

「あはは。確かに魔力は低いけど、力仕事も苦手だからね。せめて体を鍛えるまでの繋ぎにでも思ってたんだ」

「なるほど。では僕からも聞きたいのですが、その年齢まで冒険者以外のことをやっていらしたのですか？」

「うーん、何をやっていたか、ね。アランの質問に正直に答えていいかな。嘘はつきたくないし。」

「最近まで学生をやってたんだ。今は働き口を探してる」

「ほう、一体何を学ばれていたか気になりますね。その歳の学者というとなかなかの所におられたのではないでしょうか」

「……え？どういう意味だ？もしかして学者って珍しい？」

「い、いや大したことじゃないよ。他にすることがなかったただけだし」

「では何をなさっていたかだけでも」

アランがしつこく聞いてくる。興味があることには妥協しないタイプか！適当にはぐらかすしかないか。何言ってるかわからないだろうし。

「えーと、ファイナンスとかマーケティングとかアカウントとか……」

三人の顔が固まる。やっぱりわかんないよな。現代の学問は。いや、古い時代からある学問だし、専門職になら通じるかもな。しかし、それは見当違いで大きな失敗をしたことに気づかなかった。そして、次の一言で自分の失敗に気づかされた。

「あなた……ルーン語を研究してたの？」

物静かにしゃべるグリシーヌが、ひときわ小さな声で聞いてきた。

「なるほど。それで納得しました。ルーン語の学者であれば魔力等級によらず魔法に携わろうとしても可笑しくありませんね」

「おーリユウジって頭良いんだな」

「いや、研究ってほどじゃ」

「ご謙遜を。先ほどのルーン語はどれも僕が知らないものでした。いずれご教授願いたいものです」

お、俺はいつから語学研究者（しかも英語）になったんだ……いまさら経済用語ですなんていえないぜこれ。

「そのテーブルの連中、料理できたから取りにきな」

「ほら、料理できたみたいだし取りにいこう！はやく食べないとデビッドさんに怒られるかも知れないし」

ナイスおばちゃん。いいタイミング。これ以上の追求を避けるため、いそいそと料理を運ぶ。皆も食事が先決と考えて質問は終わった。

食事のあとは逆にこちらから皆のことを聞いてみた。どうやらこの世界は成人というか一人だちするのが早く、15歳ほどで職につき始めるらしい。冒険者見習いもこの時期から、と言われいかに自分が場違いかよくわかる。

「お、戻ってきたな。それでは実習を始めよう」

講義室にはすでにデビッドさんがいた。みんな席について集中して話を聞く。

「まずは簡単な魔法で、魔力の流れと魔法の発動に必要な意思を把握してもらおう」

『我が前を照らせ：ライト』

ぼうつと小さな光の玉が現れ宙に浮いている。電球のようなシャボン玉……いやシャボン玉のような電球？

「ライトとは光を表す。これは簡易的な光源を発生させる呪文で、暗闇などでの探索に役立つ必須呪文ともいえる。まずはこれを真似てもらおう」

やってみなさいと言われ、皆が呪文を唱える。俺もやってみるとしよう。

「我が前を照らせ、ライト」

……なにも起きない。横を見ると三人の前には豆電球が。おい、お前ら。あからさまに目をそらすな、傷つくだろう。

「ふむ。リュウジといったか。呪文はただの発声ではない。言葉に意思を込めるんだ。グレイライトでもライトの呪文は発動可能だ。しっかりとした意思を持つのを忘れるな。ではもう一回」

意思ねえ……なかなか難しい。現実にはできるはずもないことをやるんだから、常識が邪魔をしているのか？
非現実的といえば、夢か。夢の中ならなんでもできそうだしな。イメージするのは夢の世界、夢の中、夢の自分……と。

不意に不思議な光景が思い出される。真っ暗闇の中で、何か不気味なものに囲まれる光景が。

黒……闇……呪……魔……渴……壊……死……

自分の体が壊れていく、死んでいく。呪文が、呪いが染み込んで、精神が病んでいく。こんな光景をいつ体験したんだ。それともただの夢だったのだろうか？

最後に光に包まれてその光景は途切れた。その時、確かに聞こえた声。

『助けて』

「おい、どうした？どこか調子悪いのか」

「はっ！？だ、大丈夫です」

「そうか？じゃあもう一度やってみろ」

先ほどの光景がまだ頭にちらつく。あのときの声は…そう、こんな感じで

『我が前を照らせ：ライト』

体から何か流れ出す感覚と共に目の前に光が灯る。

「あ、でた」

皆こちらを見て安堵したようだった。

「よし、全員できたな。魔力の使い方は覚えられたか？次は今の灯りを消してみる。魔法が持続している間はある程度操作が可能だ。光を消すイメージを持つんだ」

言われたまま、光が消えるところをイメージする。すると、スーッと全ての光は消えた。

「初歩的な魔法の使い方はこんなもんだ。次は上の句と下の句についてだ。下の句であるライトはそのまま、上の句を変化させることで魔法の性質を変化させてみるぞ」

そういつてデビッドさんは再び呪文を唱え始めた。

『我が命に従い道を照らせ：ライト』

光が同じようにデビッドさんの前方に現れる。しかし、その後デビッドさんの周囲をユラユラと漂い、本人から離れたところを行ったり来たりし始めた。

「今のは、出現した光を操作することを可能にする呪文だ。操作性以外にも、光量や個数なども変化対象にできる。上の句と呼ばれる部分は、イメージを確定させるために非常に重要だ。各々が最も使いやすい呪文を唱えるのが最善だが、とりあえず今は俺の真似から始めるように」

魔法の練習が続けられる。皆が先ほどの呪文を思い出し、一斉に唱える。

『『『我が命に従い道を照らせ：ライト』』』』

それぞれの目前に、先ほどと同じような光の玉が現れる。デビッドさんはこれを動かしていたな。光を消すときもイメージが必要だったし、これも意思によって操作できるはずだ。

光を睨みつけて、動けと念じる。眩しくて直視は難しいため、実際はそのあたりを見るだけだが。最初だからか、光の動きは緩やかでゆっくりとしたものだった。

「なんか、デビッドさんみたく自由に動かないんだけど……どうすりゃいいんだこれ？」

「俺も、動きは速いんだけど軌道が定まんねえ」

デイオも苦戦してるようだが、アランとグリシー又はすでにある程

度コツを掴んだようで、自分達の周囲で光をクルクルと回していた。

「これが才能の差か……」

「ふう。リュウジは卑屈すぎると思うよ。これはあくまでイメージの問題さ」

「重要なのは…魔法を扱うときの意思」

この二人はしっかりしてるよなあ。しっかり魔法の扱いを心得ちゃってるよ。

「その通りだ。自分が魔法を使いこなしている場面をイメージしてみろ。あとは、いかにその理想に近づけるかだ」

デビッドさんのアドバイスも受けて、訓練再開。理想とする魔法の姿か…正直、光の玉が浮いてる時点でイメージは難しい。どうやって浮いてるのか、とか、移動するときの推力はどうするのか、とか疑問があるとうまくいかない。いっそ、電球に羽とスクリューでもつけてみるか。いやそれは流石に魔法じゃねえな……うん。ユラユラ動く光…人魂？いやいやファンタジーなら、妖精……！！そうだ、ティンカーベルっぽい妖精ならイメージできる！

ようやくイメージが固まったところで、周りが静かなことに気付いた。

「ん？どうしたの皆？」

こちらを呆れて見ているディオに声をかける。ディオはなんともいえない表情で、

「いや…お前の様子が気になって見てたらよ、その」

「僕らも驚いて声をかけなかったんですが、まああんな光景を見てしまうと…ね」

「…意外」

「ははっ、いやゝ確かに驚いた。飲み込みがいいといつかなんといつか」

「またなんかやらかした…？いやでも今は頭抱えて悩んでただけなのに。」

「一体何が…」

「リュウジが悩んでる間がスゴかったんだよ。ほら、今はフェアリの姿になってるけどその前が」

「見たことのない造形の羽やら靈魂のような不定形、ある種の曲芸にも思えますね」

目の前、視線を上に移すと淡い光を放つ人型があつた。ああ、考え中のイメージが即座に反映されてたのか。そのシルエットは妖精と呼ぶにふさわしく、二対四枚の小さな羽と体にフィットした薄い羽衣。直視できなかったはずの明るさが、今は蛍光灯程度に収まっている。

「生命の形になぞらえたところが興味深い…リュウジ、早く動かしな」

「飛んでいるところがみたい」というグリシーヌのリクエストに答え、光の妖精に指示を出す。

「三回まわって…ジャンプ？」

思いつきで言ってみたが、彼女は指示通り、俺の周りをクルクルと周り、最後に俺の頭の上に飛び乗ってきた。

「おおっ…さっきまでとは使い勝手が全然違う」

最初に指示しただけで、その後は考えなくてもある程度持続する操作が可能だった。さらに軌道も速度も光の玉の頃より洗練されていた。

「なかなかに見事な魔法の行使だ。生物の模倣と口頭による指示は別分野で見たことはあるが、こんな適用が効くとは」

「あの、結局のところこんなので大丈夫なんでしょうか？」

「ああ、もちろんだとも！本来は上の句の変化で目指すものだが、そこを意思の力で変化させたに過ぎない。難度は上がるが、あくまで正攻法だよ。まあ、強いて言えば、声に出さずとも操れるとよいな」

デビッドさんからOKをもらい、安心した。俺の魔法を参考にしたのか、デイオは虫羽をはやした光の玉を飛ばしている。

「おお、すげ。ちゃんと動くようになったぜ」

ディオも何とかこの魔法をものにしたようだ。あの二人は困つてないようで、球体のまま自在に動かしている。うらやましくなんてないんだからねっ

しばらく魔法の詠唱と解除を繰り返し、ライトの呪文に慣れたころディオが疲れを見せ始めた。それに気付いたデビッドさんが気遣う。

「む？ディオ、大丈夫か？」

「はは、ちょっとだけ疲れが」

「うゝむ。すまん、やめどきを誤ったようだ。魔力量的にリユウジを意識していたが、個人の技量差を失念していた。一度練習を切り上げて、講習の締めに入るぞ」

どうやら、グレイライトの俺が最初にへばる目論見だったが外れたらしい。普通なら魔力量が先に底をつくのは俺なんだが、やりくりがうまくいったのかな。妖精型にしてむしろ使い込んでる気がするのに。

「最後に、魔法のレパトリーを増やしてもらう。部屋の後ろの本棚にある魔導書から呪文一つを選び、実演してもらう。それが済んだら講習は終わりだ。以降好きなきにギルドで魔法を学べばよい」

デビッドさんはそう言って、本を取りに行かせる。俺も適当な魔法を探そう。

何にしようか悩んでいると、ディオがアラン達に質問し始めた。

「なゝアラン、何やるか決まったか？」

「ん、そうだね。典型的だけど火を起こす魔法を使おうかな。火に関する本は…これだな」

「ふん。じゃあグリシー又は？」

「…私は冷気を発生させるのを選ぶ」

「てことは、その持つてるのは水に関する本？」

「うん」

「そっか、じゃあそれ以外でか。火はアランに取られちゃったし、雷でも調べるかなあ…」

デイオは雷、アランが火、グリシーが氷か。ちゃんと、攻撃魔法らしい魔法ってのはあるんだな。他に残ってる本は何があるのやら。

「えつと、『土に関する魔法の影響』に『風に関する魔法の影響』…いろいろあるにはあるけど、まず一つ選べって言われてもな……」

うん、必要なのは攻撃魔法というより便利系な魔法だよな。水や火も役立ちそうだけど、他にはなんかないか。

「『肉体に対する魔法の作用』『光に関する魔法の影響』ねえ……ん？肉体に対する魔法？」

一番興味深い本を手にとり中身に目を通す。内容は、人体の構造から始まり、腕力や脚力、まあ筋肉の話を経て、魔法による強化を試みるという物だった。自分なりに要約すると、筋繊維を強化、増幅

をイメージすればいい訳だ。細胞で考えれば、密度が重要か。この世界じゃ科学的な考えは進んでいないのか、そういう単語は載っていない。しかし、魔法はなんでもできる可能性があることは示してくれた。

「でもこれ、呪文が載ってねえ……」

隣でアランが手のひらに火の玉を出していて、後ろからは僅かながら冷気が漂い始めるまで本を読み進めてみたが、肝心の詠唱のキーワードが載っていない。ルーン語に該当するものが無ければ呪文の効果は薄くなる。一応マッスルって書いてあるが…これと訳で筋肉だよ。これは呪文には向いてないんじゃないだろうか。しかし、これは筋力不足の自分にはどうしても必要な魔法だ。どうにかして…いつそ自分で考えてしまおうか？

頭の辞書をひっくり返す。筋力、筋肉、力、腕力…思いつく単語をとりあえず英訳する。語呂の良さ、イメージのしやすさが魔法発動率に影響するのはすでに習った。あとは、実際に試すだけだ。

「よし…やってみるか」

呪文を構築し、心の中で反芻する。二度、三度と繰り返し、詠唱に問題ないことを確認して、今度は実際に唱える。

『我が力は増大す：マッスルインラージ』

ライトの呪文のときのように、意思を持って、魔力を込めつつ詠唱する。呪文の詠唱の完全と同時に、体に違和感が現れた。服の腕部分を捲って確かめてみる。グッと力を込めると、明らかに以前よりも発達した筋肉が見て取れる。しばらくすると勝手に魔法の効果は

切れるのだが、今はとりあえずすぐに消してみる。すると筋肉がしばみ、見慣れた太さの腕に戻った。

新たな魔法の成功に嬉しくなり、早速デビッドさんと皆に報告する。

「デビッドさん、魔法の習得できました！」

「お、これで全員だな。早速見せてもらおうか」

デビッドさんの前で呪文を詠唱し、筋力は増加するところを見せる。

「この状態なら以前より重いものも持てるようになるし、いろいろ役立つと思います」

「ほう、あの本からこいつを覚えたのか。合格だな」

合格がもらえたということは、これで講習は終わりか。
デビッドさんの話は続く。

「みんな終わったからいうが、実はあの本はどれも未完成なものな。限られた情報で魔法を成功させられたお前ならこの先もきつとうまくいくだろうさ。これをもって本日の初期講習は終了とする」

『ありがとうございました！』

あのあと、みんな基本的な魔法を成功させたことを聞き、お互いに情報を交換しあった。難しい魔法なら秘匿性もあるだろうが、こんな初級魔法であればそんな心配もいらない。

アランからは火の玉を打ち出すファイアーボールを。グリシーヌからは、氷の破片をぶつけるアイスエッジを。ディオからは微弱な電力を体に纏うエレクトリックスキンを教えてもらった。

そして、こちらは例の筋力増大魔法を教えようとしたのだが、認識の違いから上手く伝わらなかった。変わりに増大を意味するエンラージという単語を教えて、許してもらった。

「機会があれば会うこともあるでしょう」

「楽しかった。さよなら」

「じゃあな！元気でな」

別れの挨拶をして去っていく三人を見送って、家に帰る。今日はとても大きな収穫のあった一日だった。アンナとリゼルさんにも安心させてあげられるな。

夕方の鐘が鳴るのを聞きながら、そういえば魔力切れについて聞き忘れたことをふと思い出し、まあ切れないように気をつけるかと考えそのまま歩き続けた。

魔法使い始めました（後書き）

投稿した日にアクセスが増えるのはなぜかと思ってたら、更新お知らせ機能があっただんですね！使ったことなくてずっと不思議でした。

魔法がいくつか登場しましたが、基本魔法は誰でも作れます。しかし、望む効果や威力によって必要とされる魔力の絶対値が変化し、さらにその魔法に対する理解度も影響してきます。火が起きる仕組みを知っていれば、もしくは経験で理解していれば、その分その魔法が得意といえるでしょう。

では次の更新でまた。

ご意見・ご感想お待ちします！

お仕事しましょう（前書き）

え？冒険なんてしませんよ。でも危険を冒す気が無くても、巻き込まれることはあるかもね！

お仕事しましょう

「良かったじゃないか。明日から冒険者の仲間入りができて」

晩飯をつつきながら、魔術師ギルドの講習が無事済んだことをリゼルさんに報告する。

「ええ。びつくりするような奴もいましたけど、俺でも平気かなって」

アランみたいな魔力量が高い奴がいても、筋力増大が可能な分、雑用仕事にも手を出せる。日雇いバイトなら見つかるだろう。

「で、お友達があんたより先に参っちまったとはね。やっぱりステータスの差かねえ」

魔力量に違いがあるはずのディオが、俺より先に疲労を訴えたことを話すと、ギルドカードに記載されたステータス表が関係していたのではないかとリゼルさんは言う。俺のギルドカードを見せると、その数値について話し始めた。

「筋力30ってのは男としてどうかと思うけど、知力が60あるのは誉めてもいいね」

「うぐっ…やっぱり30って低いんですか」

「ああ、それじゃ残念ながらそこらの男に捻られちまうよ」

うわー弱えー。筋トレしようしようと思いつつ先延ばしにしてた自

分が憎い。

「あんたくらいの歳で力仕事してりゃ40くらいかねえ。一端の戦士やつてくなら50はないとだめだってグランのハゲが言ってたかな」

「一端の戦士で50……？」

あれ？じゃあ俺の知力60ってのは

「そうそ。だから知力だけ見ればなかなか優秀なのよね。これなら魔力低くても魔術師やってけるかもね」

な、なるほど。何が災いしたかは知らないが、この世界の知力に該当部分は意外にイケてるのか。

「お兄ちゃん、頭良かったんだ〜！それなら薬師のお勉強もカンタンだね」

「いや、それはちょっと勘弁してください……」

アンナごめん。思うに記憶力とかは大して変わらない気がするんだ。だから、薬草図鑑マスターさせるレベルはちよつとついていけそうにない。種類を絞ればまだ身に付くかもしれないが、とても本職にかなう気がしない。

薬師に乗り気でない俺を、恨めしそうに睨みつけるアンナ。でも、頬が膨らんでて可愛く見えちゃ意味ないぞ〜。現にそれを見たりゼルさんが嬉しそうにしてるし。

「とりあえず、明日からギルドで依頼を探しながら魔法の練習を始めたと思います」

クレアさんからいただいた仕度金が尽きる前に、ある程度魔法を使いこなして働けるようにしておかないといけない。昔から無駄遣いはしないほうだったけど、最低限の生活費というノルマが存在する今、怠けてはいられない。

「最初のうちは無理しちゃだめよ？ギルドの依頼なんてピンからキリまであるんだし、一番報酬安いのを探すんだね」

「そうだよ！危ない依頼は絶対受けちゃだめだからね！」

二人に釘を刺されることになったが、俺だってそんな無茶はしたくない。雑用だよ雑用。冒険者らしい冒険なんて自殺願望がある奴がやればいいのですよ。

「わかってるさ。危なくない簡単なやつにするよ」

笑いながらそう言って、二人を安心させたつもりだった。

いや、まさか

漫画じゃあるまいし

死亡フラグなんてのがこの身に降りかかるとは……

確かに、今思い返せばあの会話の流れは振りだつたのかもしれない。押すな押すなの要領で、簡単簡単セーフセーフいつてたからな……いや、でも、なんで、こんなことになっちゃったかなあ……

例の会話の次の日、さっそく朝一で冒険者ギルドの方に顔を出した。

「おはようございます」

「あにゃ、おはようございます。リュウジさん」

受付、ではなく横の掲示板らしき所で作業中のミルザに声をかける。何度みても水色の髪というのは現実味がなくてわずかながらテンションがあがる。

「それって、何してるんですか？」

ペタペタと画鋏で紙を貼り付けていくミルザさん。作業の手を止めずに答える。

「これはですね、ギルドに持ち込まれた依頼書を冒険者用に貼り付けてるんです」

ペタペタペタと手際よく依頼書をさばいていく。

「へえ、なかなか手慣れたものですね」

「にはは、こういうのは得意なんですよ」

まあ冊子とにらめっこしてるよりは、この作業の方が捗りそうだし、せつかくだし依頼について聞いてみるか。

「実は魔術師ギルドで魔法を覚えたので、簡単な雑用仕事を探してるんですが」

「へ？魔法を覚えたのに雑用なんですか？」

ミルザさんが、手を止めて頭に？マークを浮かべながらこちらに向き直る。

「覚えた魔法が力持ちになる魔法だったもので、そういう雑用を探したいんですよ」

「ああ、そういうことでしたか。わかりました。今探しますからちょっと待っててください」

「よろしくお願いします」

貼り付けた紙と手に持った紙の両方に目を通し、条件に合う依頼を探し始めてくれた。本来は自分で探すのがスジだと思ったが、初心者には初心者らしく甘えられるところは甘えておこう。

「あ、これなんていいかも！」

一分ほどでミルザさんは一枚の依頼書を取り出し、俺に見せてくれた。

「なになに……『依頼内容：荷物運び』引越し作業の手伝いをお願いします。力仕事ができる方なら誰でも歓迎です、か。確かに問題なさそうですね。これお願いできますか？」

「はい、それじゃこの依頼書を持って行ってください。これが依頼を受けた証になりますから。あと、裏には依頼者の家までの地図が載ってますから、なくさないでくださいね」

「あ、ほんとだ。わかりやすい地図ですね」

「結構大きな町ですからね、きちんとした地図じゃないと迷う人が多くて……」

依頼書の裏にはこの町の一部だが、しっかりとした地図が載っていた。一部というのは、この冒険者ギルドから依頼者宅までの通り道周辺しか載っていないからだ。

「ミルザさん、ありがとうございました。今から行ってきます」

「初仕事頑張つて」

ギルドを出ると、ちらほらと仕事を受けに来た冒険者達とすれ違った。腰に剣を下げ、革鎧を身につけ、マントをなびかせる姿はまさに俺がイメージする冒険者だった。魔物退治とか探検とかするのかな、ちよつとカッコイいな……。ま、俺は安全に引越し作業に精を出すと思いますか。

お仕事しましょう（後書き）

タイトル変えたくて短めに投稿しますが、次にく書き方でこのく
らいの文章の長さだと、なんか気になってキリのいいとこまで書け
ていい不下去了よね。

そうやって続けて書くとい万字程度になるんですが、今回みたいに
3000字程度に小分けにしたほうが更新早くなっていいのかな

お気に入り登録やポイント評価ありがとうございます。ポイントは
平均4を維持してるようで、しばらくこの書き方を続けてみます。
勿論時間見つけて最初の方から見直しもしたいんですけどね…まだ
文体が定まらない（汗

では読んでくださりありがとうございました（*・、）ノシ

お化けの出る家

「ここが依頼主の家で合ってるかな」

目の前には、周りの家と続いた西洋風の建物がある。日本で言えば、長屋っていうのかな。まあ一軒一軒が二階まであるから集合住宅っていったほうが豪華さに合ってるかもしれない。

依頼書には、依頼主の名前が書かれている。勿論カタカナで。人名や魔物、たまに物をカタカナで書いたり発音するのは、カタカナ、つまりルーン語が真名を表すものと広まっているかららしい。より世界に親密性のある言語を重要視するから、そういう文化になったんだな。ああでも、ゲッコウ出身の人は日本語、つまり共通語で名前とか表記するから、地球のときとあんまり変わらないな。

ともかく、今回の依頼主、シオンさんというらしい、に会うとしよう。

トントンと二度ノックしてから、少し反応を待つ。誰かが出てくる様子はない。改めてノックをしてから、今度は声をかける。

「シオンさん、いらっしゃいますか？冒険者ギルドのものです」

すると、ドタバタという足音とともに、玄関のドアが開かれる。現れたのはおそらく依頼主であろうシオンさん。俺と同じ黒髪でセミロングの若い女性だった。同い年くらいだろうか、などと考えていたら、

「き」

「き？」

「き、キターーーー!!」

何を言い出したかと思ったら、いきなり狂喜乱舞し始め、呆氣に取られて何の反応も出来なかった。

なんとか我に返り、依頼主かどうかを確かめる。

「あ、あの、冒険者ギルドに依頼なさったシオンさんですよね？」

「助かった！助かつ……ハッ」

その女性も落ち着きを取り戻し、ようやく話が通じるようになった。

「ええ、シオンは私ですが。あなたが依頼を受けてくれた冒険者さん？」

「はい、リュウジ・キリタニといいます」

「そう、私はシオン・コクヨウ。シオンでいいわ。よろしくね、リュウジ」

「あ、はい。よろしくお願いします。シオン…さん」

自己紹介を済ませ、家にあけてもらう。テーブルに案内され、お茶をご馳走になる。

「それで、依頼の内容についてなんだけど理解してるかしら？」

「理解というか、引っ越しの手伝いとか知らないんですが…」

「まあ、そりゃそうよね。そう書いたんだから」

「はあ……」

なんだか疲れる人だな……苦手な相手だ。

「実はね、引っ越しは引っ越しんだけど、一晩泊まっていったほしいのよ」

「え？」

「実はね。最近、出るのよ。この家」

「え？」

「え？じゃなくて！そこは『何がでるんですか？』って聞きなさいよ！」

いや待つてほしい。俺の思考はその前の泊まる泊まらないのところで停止している。そんな状態で流れに乗れというのは酷ではないだろうか？

「ああ、えつと、で、何がでるんですか？」

「…幽霊よ」

「…え？」

「だーから、幽霊が出るのよ！」

俺が引っ越しにきて幽霊が出て一晩泊まる？いかん、混乱してきた。
落ち着け俺。

「えーと、引っ越しをするのは幽霊がでるからですか？」

「そうよ」

「じゃあ一晩泊まる必要があるのは何故？」

「私以外に幽霊がでることを証明する人が欲しいのよ」

「あの…依頼にはそんなこと一言も…」

「いいじゃない、ついでよついで。それに幽霊がでることを証明するために冒険者を雇っても無効なのよ」

「無効？」

「この家に幽霊がでたら、解決費用は大家持ちになるの。引っ越し先も安く提供してくれるし。でもその条件として赤の他人が無償で協力してくれる必要があるのよ」

「あー、なるほど」

「夜中怖くて眠れない日々が続いて、もう限界なの！お願い、人助けだと思って！この通りだから」

人助けをしに来たのではあるが、この通りって、片手で『ゴメンネ』的なポーズ取られても誠意が感じられねえ。その発言は普通、頭下げながら言うもんじゃないのか。

「はあ…まあいいですよ。てことは、今日は泊まるだけで、明日引越し作業ですか？」

「そうなるけど、二階の部屋、結構荷物あるから今から始めてもいいかもね」

「今からって、一人暮らしなのにそんなに荷物あるんですか？」

「ううん。今は両親が旅行に行ってるのよ。しかも旅行に出掛けてから急に幽霊が出るし……」

サイアクだー、と叫ぶシオンさんは放っておいて、今後の予定を立てる。一度アンナのところに戻って泊まりがけの依頼を受けたことを伝えるかな。それから二階の整理を始めよう。

「シオンさん、一度帰って仕度してきますね。そのあとから作業を始めようと思います」

「わかったわ。でも今更だけど、力仕事大丈夫？あまり力があるように見えないけど」

「見た目によらず力持ちですから」

心の中で涙し、早いうちに筋トレしようと思改めて誓うのだった。

「と言うわけで、今晩は帰らないから」

店の受付をしているアンナに依頼の説明をする。ふりふりエプロンが似合っていて、とても可愛らしい。リゼルさんの趣味だろうか……

「幽霊かあ。魔物じゃないと思うけど、気をつけてねお兄ちゃん」

「わかってる。危ないことはしない。それじゃリゼルさんにもよろしく」

「いつてらっしやうい」

あとはシオンさんの家に向かうだけだな。シオンさんの家の場所をまだ完璧に覚えてないため、行きも帰りもギルド経由だ。冒険者ギルドの前を通りかかるとき、声をかけられた。

「おゝい。リュウジじゃねえか！元氣か？」

「デイオ！」

煤けたマントを身に付け、外出用の出で立ちになっている。つまり、これから外で活動することになるのか。

「デイオも依頼受けたの？」

「ああ、街中の警邏をやるんだ。なんでも最近盗みが横行してるらしいぜ」

「泥棒？」

「空き巣ってとこかな。犯人見つけたら追加報酬がでるから、怪しいやつ見つけたら連絡してくれよ！」

「それはいいんだけど、連絡手段がないよ。ギルドに言付けでもすればいい？」

「おま、ギルドに伝えたら意味ないだろ。町の入り口に、月熊亭って宿があるから、そこに頼む」

「わかった。じゃ、俺も仕事あるからまたね」

「おう。お互い頑張ろうぜ」

ディオと別れ、シオン宅へ急ぐ。それにしても空き巣か。うちはいつも誰かいるだろうし安心かな。

「ただいま戻りました」

「おかえりー。私これから大家さんところ行くから、留守番してて」

会うなり出掛けるシオンさん。そんな簡単に家を空けてもいいのか？依頼で来るとはいえ俺は他人なのに。別に何かするわけでもないけど。とりあえず引越し作業進めるかな。あ、でもダンボールとかないよな…この世界じゃ木箱とか樽で運搬するとかえるのが妥当か。使えそうな容器、あればいいんだけど。

幽霊さんいらっしゃい（前書き）

三ヶ月空いた更新です。他の方の面白い小説を読んでいたら自分の小説が進みませんね。

幽霊さんいらっしやい

二階に上がる階段を見つければ、二階にあがってみる。階段をあがったところで振り返ると、隅に木箱が山積みされていたのを見つけた。

この木箱を使えばなんとかなりそうかな。

木箱の目処がついたので、次は部屋に目を通す。二階には二部屋あり、シオンさんの話によれば御両親が使っている部屋と物置代わりになっている部屋で中には各地を回って収集された品が置かれていて、さながら展示室の様相を見せていた。

「なんか博物館に來たみたいだな」

部屋には風景画が数点壁にかけられていたり、用途のわからないアクセサリーのようなものがガラスケースに入れられてたり。これをいちいち運び出すのは大変そうだな。美術品なんかは衝撃に弱いから注意が必要だし。タンスとかテーブルみたいなでかいだけのを運び出すには苦労しないんだけど、割れ物ばかりだときついだろうなあ

……

それにしても、幽霊なんて本当に出るのかなあ。幽霊物件とか日本じゃお祓いをしたりお清めするイメージがあるんだが、ここは俺の知らない世界だし、今は幽霊を信じてないけど、魔法やら神様が存在するとなると、心霊現象もあり得そうで困る。もしかしたら、本当にでるかもしれない。そうだったら駆け出し冒険者にはお手上げだし、素直に引っ越し作業に精を出すでしょう。

『我が力は増大す：マッスルインレンジ』

美術品の扱いがわからないため後回しにして、大まかな家具を運ぶ

準備を先にする。魔法の効果を確認めつつ、大小様々な家具をまとめていく。明らかに重たそうな物でもこの状態なら問題なく運べそうだ。ギルドで使ったときは自分で効果を消したので、実際の効果時間はわからない。せっかくだし実験もかねて大体の時間を計りながら作業することにしよう。念のため重そうなものから先に手をつけておこう。

そのまましばらく細々とした作業が続き、魔法の効果が切れ掛かる度に新たに掛けなおし、おおその時間を把握していくと五分程度で強化された体は戻ってしまうことがわかった。幸いにもデュオがみせた魔力切れのような疲労状態にもならず、気づけば三時間ほど経っていた。外は徐々に夕焼け空になり、少々お腹がすき始めた。

「ただいま」

晩御飯について思考が飛びそうになったとき、出かけていたシオンさんが帰ってきた。出迎えるため部屋を出て一階に向かう。

「おかえりなさい。結構遅かったですね」

「引越しの打ち合わせと晩御飯の材料買ってたら思ったよりかかったちゃって」

そついつて籠に入った食材を見せてくる。名前のわからない果物、野菜、少々のお肉。ぐう、とお腹がなるのがわかった。

「ははっ。せっかくだし食べていきなよ。一人でいるのもつまらないからね」

「いいんですか？じゃあお言葉に甘えて」

「その代わり手伝ってよね」

「…頑張ります」

台所に立ち食材を切るシオンさんにまず言われたのは、火を起こすことだった。これ使って、と渡されたのはよくわからない石ころ。どうすればいいかわからず睨めっこしていると、

「もしかして、火打ち石使ったことない？」

「は、恥ずかしながら…」

「火打ち石使えないなんてどんな生活してたのよ、あなた」

あきれた顔で火打ち石と呼ばれる物の使い方を説明してくれる。あ、火打ち石ね。子供の頃、河原の石と石をぶつけて火花だそうとして全く意味がないことに気づかされてからすっかり忘れていた。余談だが、火打ち石はフリントと呼ばれる硬い石を用いて火花を起こすのが一般的で、手渡されたこの石も専用の物で、とりあえずぶつければ火花が出るから、それで消し炭などの火口ほくちに点火すればいいとのことだった。とりあえず、世間知らずなもので、と曖昧に誤魔化しておいた。嘘は言っていない。むしろ普通の世間知らずのさうらに上をいつてるわけだし。

無事に火をつけて、料理の準備を進めていく。完成したのは具沢山とは言えないスープ、それとサラダにパン。感謝して晩御飯を頂く。食べながら気になった点について話をしていく。いざ引越しになれ

ばとりあえず運ぶのは大丈夫。あとは美術品らしきものの取り扱いについてだ。」

「ああ、あれね。そこそこ値打ち物らしくて壊されるのは困るから、あの部屋の物については私が運ぶわ」

「そうですか。じゃあ俺は他のところと重くて運べないやつを」

「ええ、よろしくね。それで、今晚寝るところなんだけど一階の私の部屋でいいかしら？」

「別にどこでもいいですけど…ん？」

おかしい、聞き間違えたか。今シオンさんの部屋がどうか聞きたが。

「え、あのシオンさんのお部屋ですか？俺が寝るところって」

「そうよ、幽霊問題に関しても、私が聞いたのは部屋で寝るときだったんだし同じ場所じゃないと」

「あーそうですけど…いいんですか？」

同じ部屋で、と言い掛けて、こちらにっこり微笑みながら

「あ、でもベッドじゃなくて床で寝てね。それと私が二階で寝てる間に部屋を物色するのもだめだからね？」

うん、まあそうですよね。わかってましたよ。はは。

夜はあまり騒がしくしたら近所迷惑とのことで作業は中断し、寢床の準備をしておいた。地球でいう西洋文化なため、床を雑巾で水拭きし、毛布で寝転べるように掃除する。部屋の明かりはランプや蠟燭といった消耗品なので、夜更かしはできないし、とりあえず時間が過ぎるのを待ちながら幽霊対策を考えておくことにした。

シオンさんには世間知らずのレッテルを貼られたので、開き直っていろいろと質問をすることにした。それでわかったのが幽霊を含めたアンデッドと呼ばれるモンスターのことである。人に限らず生物全体の死や不幸、恨み辛みなどは負のエネルギーを発生させ、それはときおり生きる者に害をなす存在として現れる。御伽噺のようなものには死者の行軍や死者の都など、ぶっちゃけホラー話が半分実話になっているものまであるらしい。もつともこういった存在は、靈感がないと倒せないわけではなく、魔法で対処可能かつ実体がある相手なら殴り倒すこともできるので、地球で考える悪霊や悪魔というよりはちよつと変わってるモンスターという認識でよさそうだ。ここで問題なのが、この家に現れる幽霊である。これがこの世を彷徨う魂なのかアンデッドに属するモンスターの類なのか。前者なら神様にお祈りという神官任せになるだけで特に問題はないが、後者なら無用心に熟睡するわけにはいかない。幸いシオンさんはまだ襲われてないので安心だが、念のため今晚は寝ずの番をすることになる。

ここまで話して時刻は10時くらいだろうか。幽霊騒動のおかげで寝不足だったとシオンさんはさつさと二階にあがってしまった。こちらも寢床で横になりながら今度はひとりで幽霊対策を考える。今の俺は武器はなく防具もない。できるのは駆け出しレベルの魔法少々であり、この状態で戦うとなると、筋力をあげて近くにある包丁なり箒なりでぶん殴るか、火事を覚悟でファイアーボールを撃つ

か、アイスエッジを撃つことしかできない。お金がないため武器・防具はまだ集まらないし、戦闘技術もすぐには身につかない。となれば、荒事対策のために早急に魔法技術を上達させる必要がある。幸い魔法の構成要素であるルーン語にはある程度馴染みがあるし、実験と実践を繰り返していくしかないだろう。そういえば、クレアさんが使ってくれた回復魔法も習得できるのかな。信仰心が1しかないけど……。いっそ呪文だけ流用して魔術呪文にしたほうがいいかもしれない。あとは新しい魔法だな。特に身を守る術となる魔法。直接的なのが盾や鎧、結界で概念的なのが守護や防御といったところか。英語ならシールドにアーマー、バリアーにディフェンス、ブロック、ガードあたりが対応してそうだ。ゲームだと膜って意味でスクリーンも使われてた記憶がある。

候補となる単語はおいといて、求める効力についてどうするか考える。身を守る防具代わりになるのが重要だが、自身が理解・想像できるようなものでないと魔法は発動しない。絶対防御壁なんてものはおそらく無理だ。いくらファンタジーが可能になるからといってイメージが難しい。それこそ神様に発動プロセスを丸投げしてようやく可能性が見える代物だ。となると、衝撃吸収を元にした障壁や火や水などの他の要素を媒介としてエネルギーを分散させるものを連想したものがよさそうだ。衝撃吸収のイメージは何かいいだろう。卵が割れない低反発クッションとかテレビでやってたのを見たことがある。他にはゴムとかスライムとかは打撃を無効にするなんてのが定番だ。しかし、その仕組みについてはどうなんだろう。これもまた難しそうだ。仮に理解できてイメージも可能になったとして、次は魔法の実体化についても疑問が出る。

「筋力アップは直接体に作用してるみたいだけど、概念的な物も扱えるのかなあ……」

身を守る魔法が発動したとして、盾や鎧のように実体があるものに身に付けることになるのか。それとも、その効力だけが一定時間得られるのか。鎧や武器を召喚して身に付けるのもかつこよくていいのかもしれないけど、重かったり動きを阻害して大変な気がする。できれば概念だけを効果として得られれば嬉しいんだけど……

うーんうーんと悩み続けていると頭が疲れてきたのか、徐々に睡魔が押し寄せてきた。時間はもう深夜といっていいだろう。これじゃあ朝まで起きてるのは大変だなと思っていると、カッーンと、何かが響く音が聞こえてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8462u/>

異世界で我が儘に

2011年11月30日16時51分発行